

ラグナレク 伯爵

しづやりふかふ

Ragnarok

『紫の斑点を滲ませた濃紺の甲殻を剥いでオマール海老の乳白色の身を取り出だす。口にふくむと汁があふれ、馨が舌を満喫させる。』

「伯爵、貴方は信じられない^{えきてい}駅通をお持ちのようだ。どのような駿馬を継げばラス湾から千kmの内陸にあるこのブロムショフの地まで、かような鮮度を維持することができるといえるのでしょうか。まったく以て奇跡、魔法です」

壁に古いタペストリーと先祖の歿年を銘する肖像、石床に龍脚を置くオークのテーブル、黒ずんだ真鍮製の燭台、かくも暗鬱な大食堂の荘厳を散じるべく普齊子爵^{ふせう}が努めて明るく賛嘆の辞を捧げても、湖上城の若き城主、神々^{ラグナレク}の黄昏を自称するフランソワ・ドルレアンは背もたれ高い椅子に深く坐し応えなかつ

た。

内面の遙か彼方を眺めやる眼差しでこう言っただけである。

「たとえばそう、目薬を差すときだ、わかるかね、子爵。自分で知りながらやっているにもかかわらず、誰しも必ず瞬きをしてしまう。そう、必ずだ。目蓋を微動だにさせぬ人間を私はいまだかつて見たことがない。無害であると承知してつつも身を守る為、条件反射的にやってしまう。

子爵。これが生存の蠢きだ。未だ幼い頃、私はそのようにして母親を殺した」

腰を覆うほど長く燦めく白髪をまつすぐ垂らしたこの人物は贅沢なお世辞でも言ったかのようにゆっくりと微笑んだ。

（「ラグナレク伯爵」ファルコ著）
』

タイプライターの指尖を唐突に止めた大男が左眉を吊り上げて席を立ち、ア
ンジェラの真向かいのソファに着坐後も眉位置を変えぬまま額に皺寄せて葉巻
に点火すると、彼女は溜息せざるを得なかった。それでもやむなくブリーフ・
ケースから書類をとり出だす。

WL（ワールド・リタラクチャー社）のロンドン本社からパリ支社に着任し
て二年にもなるがファルコというペンネームを持つこのアルゼンチン作家と
の打ち合わせにはいつも緊張を強いられた。癖のある気難し屋ではない。むしろ
鷹揚で快活、二m近い巨軀にフィデル・アレハンドロ・カストロ・ルスのよ
うな髭を蓄えた四十代の話し好きなラテン人だ。

だが同郷の革命家、故チェ・ゲバラを崇拜してやまない彼には時折見せる過

激な一面があつた。それと併せて自己主張の強さだ。アンジェラもイタリア系の父とインド系の母とから譲り受けた一八〇cm超の瘤の強そうな痩身と漆黒のストレートヘア、まなじり 眦のきつい（パピルスに描かれるウジヤトの目のようだとよく言われる）眼で、けして大人しいタイプではなかったが饒舌で省みることを知らないファルコには辟易させられること多々であつた。

「それで、例の監督の件なんだけれど、出資する我が社の方針としては」

昨年発表された『ラグナレク伯爵』の映画化が決まるとアンジェラは深く嘆息したのであつた。絶対揉めるに決まっていたから。案の定、出発点から暗礁に乗り上げていた。出版社や映画会社の用意した監督はどれも却下で、ファルコは二十一歳のギリシア人青年、無名のアマチュア映像作家ユリアス・パパタナシューを指名したのだ。いくつかの短い自主制作映画しか創ったことがない

彼を登用することは常識ある企業家たちから見れば狂気の沙汰であった。

ファルコはアンジェラに皆まで言わせず、例の大袈裟な身振りで霹靂のような低音^{バス}を上げ言う。口調は絵本に出てくる陽気でならず者の騎士のようだった。

「冗談じゃない、アンジェラ、君は俺の芸術を理解しているだろう。俺の作品は着色された駄菓子みたいな映画にして欲しくない、ただ、それだけだ。無理を言っているわけじゃない。芸術家として最低限の、ほんのささやかな望みだ。

君にはきつと解ってもらえると信じていたんだがまったく以て残念至極だ。

いいか、ユリアスは無名に等しい。けれどそんなことは問題じゃない。では訊くがフェルメールは在命中に名声を得ていたか？　ゴーギャンはどうだ？　フリードリヒ・ニーチェは『善悪の彼岸』を自費出版したぞ。

俺は無分別を言っているのではない！　一度でいい、ユリアスの映画を観て

みろ。繊細で哲学に満ちている。ただの哲学ではない、タレスのように古代に哲学者が賢者であった時代の哲学だ。フッサールの現象学なんて呼びじゃない！

ほら、彼の映像をDVDにコピーしてある。これを持って社長連中によく話してくれ。いいか、アンジェラ、俺は絶対にこれを譲らない」

これだけのメッセージを言うのに、大概四時間くらいはノンストップで喋り続けるのだ。カストロ並みに八時間も演説しないだけましか、そう自分自身を慰めるしかなかった。柔らかな繻子のクッションも玄武岩の礎石みたいに感じられる。

モンソー公園に近い一七区のアパルトマンに差す冬の陽射しが黄金色に変わり、ついに街灯の光となって、ようやくファルコの大論説が終わる。

結局彼女はDVDを持ってもう一度会社で話し合う約束をする羽目になったのだがその前にユリアスに会っておくべきだと思い至った。ファルコが何でもないことだよというように軽く眉を上げ革手帳をめくる。

「彼ならアテネにいるよ。アドレスと電話番号とを教える。携帯電話は持っていない。いい考えだよ。君も行ってみた方がいい。そうすれば分かる」

去り際にアンジェラは気になることを一つ思い出した。

「そう言えば、ファルコ、あの手紙の件はどうなったの？ あれ以来、何も聞いていないけれど」

肩をすくめ、下唇を突き出す彼が応える。

「気にすることはない。よくあることだ。ラグナレクは強烈なキャラクターだから。俺の作品を読んですっかり彼になりきった読者が自己主張を試みた

くなった、それだけのことだよ」

アンジェラも同感だったがどうにも気になっていた。二週間前、消印のない無記名の封筒に入った書簡箋には見たこともない楯紋がレターヘッド部に型押しされ、文面にはこう記されていた、

「一度、貴殿にお逢いしたし フランソワ・ドルレアン 〴^ラ神^グ々^ナの黄^レ昏^ク 伯爵^〵」

エリニコン国際空港から早速教えられた電話番号を回したのだがあいにく留守らしく出なかった。直截居室に出向いてみようかとも思ったがいらないのがわかっていて行くのも虚しい。

実際会うこと自体がアンジェラにとって気の進まない仕事だった。だからこ

そ逆にここまで来てしまったと言える。機内でユリアス作品のDVDを見た。確かに繊細であった。だがその繊細さは解剖学的な厳密さに由来するものであって、人間も自然物であることを暴く描写を以て言葉には捉え切れない切実を醸し、微妙な余韻で胸中に疼かせる類のものであった。

例えばある作品は夫と死別して故郷の島に帰って来た二十代後半の女性に対する十二歳の少年の淡い恋の物語だった。それは単に思春期の様々な欲望と緬い交ぜでかたちをすら成せない恋情を表わすばかりでなく、少年もオスであり恋愛も生物学上の命題でしかないということを匂わせる映像で、目を背けたいような生々しさを持っていた。それでありながら芸術的カタルシスを与えることができるのは、精緻な解析の正しさが直截的な現実として観る者の心情を複雑な切ない思いで絡め取るからに他ならない。

率直に言って苦手なタイプである。アンジェラは観たことを後悔した。憂鬱は加速度を増していた。留守で安堵したくらいであつた。

現実逃避を決め込む。折角のアテネなのだ。

以前から興味のあつたアクロポリスへ向かうことにした。東ターミナルを出て左側、エキスプレス・バス乗り場でアテネ行きに乗る。三十分後ゼウス神殿に近い停留所で降りた。白い岩山が聳えるのが見える。処バルテノス女神へ捧げられたパルテノン神殿が蒼穹に偉容を浮き上がらせていた。

丘への入り口は一つしかない筈だ。道がよくわからないので地図を片手にデイオニシウ・アレオパギトゥ通りに沿って歩いた。やがてヘロデス・アティコス音楽堂を右手にする坂があり、それらしい。入って行くと丘の西の側面を登る。しばらくして郵便局や売店のある広場が見えてきた。チケット売り場もあ

った。

二塔に挟まれた門に向かう。フランスの考古学者ブルーエが発掘したブルーエ門。これは出口専用なので迂回し、入口から階段を踏む。上れば前門プロピレーアだ。屋根は既に遙か昔に失われているがドリア式の列柱とイオニア式の列柱とが巧みに居並ぶ。

振り返ってアテネの下町を見下ろすと颯爽たる風。前髪が滲む汗を撫でる。門を抜けてアクロポリスの丘の上に出た。神域が広がる。左にアテナ古神殿の礎石、右にアルテミス神殿の遺構、そして何より目前には今日一部の破風と列柱としか残さずとも世界に冠たる人間の叡智、紀元前四四七年にペリクレスが着手したパルテノンが大理石の燦然たる偉大を馨しく仰がせるのであった。

アンジェラは嘆声を上げ、見入り続けたまま時々つまずくのも意に介さず吸

い込まれるように近づく。

ギリシアの空にこの石の蒼古たる白い晰らかさが何と美しいことか。今は忘れられた明朗という名の崇高、正午の厳肅がここには息づいていた。

彼女は大きな礎石の一つに坐り、眺め続けていた。ここに来たら絶対に愛でようと思っていたエレクトイオン神殿のカリアティデイスのことも忘れて。

しばらく見惚れて過ごし、時を喪失していたアンジェラはいきなり声をかけられ、我に返った。

「^ヤ_ー^サ_ス（こんにちは）。素敵ですね。黒いスーツ・ルックはシックです。フランス人には見えないけれどパリの人ですか。いやパリジェンヌがそういう服装をしているって固定概念があるものだから」

正確で自然なフランス語だった。話しかけてきた男はまだ十代後半としか思

えない頬で微笑んでいる。

「怪しい者じゃありません。そのう、写真の勉強をしているので、是非、モデルになってもえたらと思つて」

発声の抑揚が知的だったし、カメラもライカ社製でただの軟派者ではないことはわかる。だがルックスが信じる気持ちにさせない。背中まである豊かな髪が銀色の縮れ毛なのはともかくとしてもみ上げ部分を幾条かに細かく編んで垂らしたり、そこをアフリカ民芸品のミニチュアで粉飾したり、物憂げな灰色の双眸の周りが金の刺青でアールヌーボー調の蔦草模様に縁取られたりしていれば信じる方がどうかしている。

どんなに笑顔が親しみ深く知性を匂わせていても、奇妙な意匠の若者をいきなり信じられるほど二六歳は若くなかった。

「あなた、申し訳ないけれど、わたしはこれでも忙しいのよ。浮ついた観光客の女の子らと一緒にしないでくれるかしら。仕事でアテネに来ているの。ちょっと息抜きしているだけ。邪魔しないで欲しいわ」

アンジェラの眸をまっすぐ見ながら微笑を止めぬこの青年は訊くのであった。彼女にはその作り物らしさが不快に感じられた。

「どんな仕事ですか。きつと素敵な仕事だと思いますよ」

アンジェラは溜息を吐く。血気盛んな若者には飽き飽きしていた。皆同等品ばかりで退屈でしかない。

「あなたが何を以て素敵と言うのかわからないけれどそれほどのものじゃないわ。プライドは持っているけれどね」

「何ですかね。多分アート関係だと思えますよ。服飾のデザイナーか、或いは

古い絵画の修復とか、そうだな、音楽家、小説の編集者。どうですか」

アンジェラは内心驚いたが嘘を吐く意味もないと思った。

「あたり。編集者よ。でもどうして？　それだけが他に挙げたものと少し違うわ」

銀髪の男が頷いた。

「実は初めからそれだと思っていましたのですけれどね、外れるといけないから、あたり障りのないエレガントな職業をいくつか言い添えてみたんです」

アンジェラは眉を顰め、改めて男をまじまじと見た。

「あなた、変わっているわね。きつとここよりデルフィで仕事した方が似合うわ」

さらに大きく微笑む。

「ジョークですね。でもアポロンの神託を受けられるのは女性だけです」

「知っているわ。だから冗談なのよ」

「短い時間でいいですから、写真を撮らせてもらえれ・・・」

「O.K., オーヒエフカリス トー (いいえ、結構です)！」

「でき上がったら写真をホテルまで送ります。思い出になりますよ」

その言葉を聞くとアンジェラは今まで会話をした自分を愚かしく思った。

アンディ オ
「Auntie (さよなら)！」

立ち上がった彼の脇をすり抜けてパルテノンの壇上へ向かう。せっかくの気分が台なしだった。歩きながら頬を膨らませ、左斜め上をにらみつつ黒革のヒールを鳴らす。キャリアティデイスの女像列柱でも見て気分を変えようと。

タベルナが軒を連ねる通りでどうせならブズキ演奏をとアンジェラはアレクサンドロスというブズキアに入った。午後八時三十分を過ぎて楽器を持った三人の男たちが高い椅子に坐る。始まった。物悲しい音楽がアンジェラを旅愁に誘う。

彼女の眼差しは中空を漂い、スプーンの動きは止まっていた。昼間アクロポリスであちこちが欹けた列柱に手を触れた瞬間、大理石の曲線のぬくもりを感じたことを思い出す。あのとき不思議な感情を覚えた。柱が生きていた頃の歴史が刹那に脳裏を過ぎったような気がしたのである。何とも言えない感覚だった。

やがてアンジェラの考えはとりとめもなく彼女を奪って翔け廻る。過去は既にどこにも存在しない。その事実が改めて不思議なことに思えた。過ぎ去った

日々はもはや記憶でしかないのだ。心でしかない。誰も過去を変えられない。

過去とはもはや変えられないものの代名詞だ。巖よりも巖然とした現実である。

同じ心のことなのに小説が現実ではないのはなぜなのだろう。なぜ読んで心に起こった現象が現実が起こったこととして取り扱われないのだろう。

アンジェラはそんなことを考えている自分に気がついて思わず鼻尖で笑った。何てばかなこと思案しているのかしら、どうかしているわ、と。現実へと思いを戻す。

ここに来る途中もユリアスに電話したが不在であった。一日目にして、いたい、この出張は何の為だったのかわからなくなりそうになっている。編集長に断らずに一存で出て来ていた。往復を含めて二日目の夕方には編集部に報告を入れられると高をくくっていたのだ。いずれあと一日の滞在が精一杯だった。

ホテルの部屋に戻るとシャワーを浴び、髪を乾かしてシガーに火を点けた。

フアルコの本を取り出し、ベッドに横になりながら開く。無論『ラグナレク伯爵』だ。

『ヴィクトイル・ドルレアン伯爵は妻の切迫した連呼に目を覚まされた。金製の時計が暖炉の上で告げた時刻は午前二時。飛び起きながら半身を捻って寝台の隣を見る。老伯爵の眼は驚愕で睜みひらかれた。

新妻ヘレナの開脚の上に黒く毛むくじらの生き物が跨って、艶光する尻を蠢かせている。十七歳の少女の華奢な指がシーツに襷を寄せて緩ませず、剛毛に覆われた長大な陰茎は悠然と出入する。陰唇の潤みが炉の炎に燦めいていた。

魔物はヴィクトイルを嘲るように振り向く。尖った鼻に切れた口から猥らに

垂れた長舌とこうもりの翼、古書の挿絵で見た夢魔の姿そのままであった。

歳に似合わず物静かで貞淑な妻が喜悅の涙に眉根を顰ませ、足指をにぎるように曲げて痙攣する。伯爵には一度たりとも見せなかった若さを奔放に晒し、彼の胸を裂く。それは妻を陵辱された憤りよりも強い衝撃であった。

激情に駆られ、壁に懸かる伝来の剣を手取る。鞘から抜くより早く夢魔が身をよじって刃をかわした。膨張した陽物からほとばしる液が老伯爵の頬にかかる。魔物は哄笑を残して闇に消えた。

ヴィクトイル・ドルレアン伯爵は泣いて謝罪するヘレナに罪なきことを理解しながら、彼女を赦すこともせず、また自刃しようとする彼女をなじる。「おまえは、純潔の誓いを裏切った上に、さらにわしに自殺した女の夫という汚名を附与するのか」と。

以来、自暴自棄に飲酒しては狩猟に出て遅くに城へ戻り、深夜、涙に濡れた妻の面に二度と笑顔の戻らぬ様を眺めて無表情に時を過ごすだけであつた。

悲劇はこれで終わらなかつた。』

これは従来の方アルコのタッチではない。アンジェラは以前からそれが氣になつてゐた。こういう小説を書く作家は多くいるだろうが彼とは余りにもかけ離れている。最初にあの手紙を見せられたとき背筋に悪寒が走つたのもそれと無関係ではない。方アルコらしくない物語が異様な風貌で存在を際立たせ、作者を呑み尽くすような気色すら感じる。

翌日、ともかくもユリアスのアパートに向かつた。古い建物で、アドレスが示す場所はその三階であつた。安っぽい似非アールデコ調の手すりのある螺旋

階段を昇る。

ペンキの剥げた木の扉には表札などなかった。ノックする。返事もなかった。溜息とともにアンジェラは戻ろうとする。目の前にあの若者がいた。

銀髪の青年が微笑む。

「こんなところで何をしているんですか」

アンジェラはむっとした。

「あなたには関係ないわ」

彼が頭を掻く。

「ユリアスに用事ですか？」

アンジェラはウジャトの目でにらむ。

「知り合いなの？」

眼窩の刺青を延ばして笑う。

「運命ですね」

にらみながらもアンジェラは吐息する。

「このぐらいで運命なんて言われちゃ、切りがないわ」

「そうですね。でも彼に用事なら、どうぞ」

目を丸くして彼女は唇を尖らす。

「あなたねえ、他人の家を・・・」

編みこんだ髪が揺れる。

「まだわかりませんか？ 私がユリアスです。ユリアス・パパタナシユー。あ
なたの名前は？」

椅子は木製で、かつ坐りにくい。跨ぐように坐って背もたれに両肘を載せ、アンジェラは問う。

「で、あなた自身はどう思うわけ？」

ユリアスは首を傾げ、眉を寄せる。

「そうですね。私はやってみたい、ただ、それだけです」

アンジェラは嘆息する。今日の何回目だろう？

「そんなことじゃ、収まらないのよ。わかる？ これは大がかりなプロジェクトなのよ。遊びじゃないわ。企業が真剣にやっているビジネスなのよ」

ユリアスが厳しい眼差しになるのをアンジェラははじめて見た。

「だから、ファルコは私に電話をくれたんじゃないでしょうか。あなたこそわかりますか。彼の作品は芸術です。商業用の企画じゃない」

アンジェラは一瞬、言葉につまったが、

「わかったようなことを言うんじゃないのよ。そういうセリフはね、巨匠とでも呼ばれるようになってからにして欲しいわ。有象無象までそんなこと言い出したら、世の中、收拾がつかなくなるわよ。いったい、お金はどこから出ると思っているの？」

「どこからお金が出るかは問題じゃないでしょう。どう使われるかが問題です。無為に費やされないことこそが大事でしょう。違いますか」

扱いにくいのがもう一人増えてしまった、そう思わざるを得ない。

「いいわ。ともかく明日、一緒にパリに来てちょうだい。いいでしょう。あなたの人生にとっても大きな問題なんだから。うちの部長や支社長、映画会社の重役たちを説得できればあなたはサクセスを得られるのよ。学校やら仕事やら

あるのかもしれないけれどそんなの放ってちょうだい、芸術家でしょ？ どう？」

「学校には行っていません。仕事もアルバイトを二つやっているだけです。映画の仕事ができるならどっち道パリへ行くことになるんでしょうし、そうでなくとも何か仕事を紹介してもらえればパリで暮らしたいです。フランス語もできますから」

「OK. 明日、空港の東ターミナルに来て。もうあなたの分のチケットも買っているんだから」

翌日、国際線のエコノミークラスでフランスに向かった。窓際に坐って外を見つめているユリアスの横顔には未だあどけなさが残っている。アンジェラは少し優しい気持ちになって訊ねた。

「今回のこと、家族は何て言っているの？」

向き返らずに彼が応える。

「家族はイラクリオンに義父がいるだけです」

「義父？ イラクリオンってクレタ島にあるあの街のこと？ そこで生まれたの？」

「よくわかりません。多分そうだと思いますけれど。捨て子だったんです。教会の前に捨てられていた、そう聞いています。教会の雑役夫だった父が僕を引き取って育ててくれました。彼らにはこどもがいまませんでしたから」

「彼ら？ 義父がいるだけだって言ったじゃない」

「義母は随分前に亡くなりましたから。十五年前です」

「そう。お父さんは大変だったね」

「無論そうでした。父は私の為にすべてを捧げてくれた。けれど、私は父の望みを裏切ったのです」

「どうということ？」

「父は私にギリシア正教の神父になってもらいたかったんです。でも私にはできませんでした」

「そうね。誰も皆自分の望みがあるから。ましてや正教の神父さんじゃね。自発的な意志がない限りは相当きついんじゃない。アトスの修道院にでも行けとか言われた？ あの女人禁制の聖域の」

「ちよつと違いますけれど、まあそんなところですよ。私は」

「映画がやりたかったのよね」

アンジェラはユリアスの自主制作した映画を思い出した。あのような作品を

創る人間がギリシア正教の神父で収まりがつく筈がない。

「そのときは特に映画って決めていたわけでもないんですけど、アートに興味がありました」

「それじゃ無理もないわ。でもお父さんも少し可哀想ね」

「とても気落ちしていました。アテネに出る日はほんとうにこれでいいのかと自らの良心に何度も問いましたよ」

「でも私はそれでよかったと思うわ」

「私もそうは思います。でも父を、私を無償の善意で育ててくれた父を裏切ることは堪え難いことでした」

「ねえ、こんな言い方は変だけれど人間の行為に無償ってことはないのよ。誰しも必ず何だかのかたちで自分の幸せを見つけているものなのよ。」

あなたのお父さんもあなたを育てることで彼の幸福を得ていた筈だわ。絶対にね。ましてやこどもがいなかったり奥さんに先立たれたりしたんだから、あなたの存在は彼の心の大きな支えになっていた筈よ」

「ねえ、アンジェラ、それがわかっていいるからこそ自分だけの為に父を置いて行くことが辛かったんじゃないですか」

「まあそうよね」

彼女はもうそれ以上、言う気がしなくなった。情感は強い方だが繊細な性質ではない。それにこれからファルコの意向をどう会社の人間に伝えるかを考えなくてはならなかった。気持ちが悪鬱になってくる。

シャルル・ド・ゴール空港に着くとパリは土砂降りだった。篠つく滴に身をすくめながらタクシーに飛び乗る。

アンジェラはファルコのアドレスを中国人運転手に告げた。

「雨なのはわかっているわ。うだうだ言わないで急いでちょうだい」

着くと扉を開けたファルコが大袈裟に目を丸くして皮肉を言う。

「よく俺が居るってわかったな」

そんな言葉でめげるわけがなかった。

「あなたは居なくちやならなかったのよ。アポイントメントを取る余裕なんてなかったわ。さあ、さっさと出かける支度をしてちょうだい。お偉いさん方を説得するのよ」

編集部は沈鬱だった。アンジェラら三人が入ると皆が一斉にこちらを向く。

見るだけで何も言わなかった。

「どこに行ってたんだ、アンジェラ！」

席を立ててディスクを迂回しながら副編集長のポールが顎を突き出して言う。

アンジェラは肩をすくめた。

「仕方なかったのよ、ポール。言わば緊急事態ね」

ポールの表情は暗かった。

「編集長が死んだ。支社長も一緒だ。それだけじゃない、AN映画のマルセルとジャンもだ。信じられないよ」

マルセルはANの副社長で、ジャンが制作部長だ。

「どういふことよ、ポール。冗談を言っているの？」

苛立ちを抑え切れないように副編集長が両手で左右を払う。

「こんなことが冗談で言えるか。昼食に出掛けようと乗ったAN本社のエレベーターが墜落したんだ。四人とも二十四階から真っ逆さま、即死だ」

アンジェラは目眩を覚えた。

ファルコはキャラバツシュ・パイプ片手に舞台俳優よろしく大きく身振りする。

「どうやら神は俺の作品の映画化がお気に召さないらしい。四人の死を思うと悲しみでやり切れない気持ちだ。

もちろん、アンジェラ、神慮が計り知れないとはわかっている。だがまったく以て信じられん、エレベータが墜落！ しかも映画制作にかかわる重要な責任者ばかりがまとめて即死だ！ こんな悲劇があるものか。

それとも彼らに特別な罪があつたと言うのか。神に誓って、考えられんことだ！ 優れて善人とは言えなかったとしても決して死に価するような罪過のあ

った筈がない。家族を愛していた、あたりまえな人間ばかりだ。家族、おお、そうだ彼らの家族だ。何と俺は言うべきなのだ！　もしも俺の作品の罪に巻き込まれ、彼らが非業の死を遂げたのだとしたなら！

だが俺には理解できん。いや絶対にだ！　アンジェラ、君は何事だと思うかね？　俺が神に逆らったとでも思うかね？　あり得んことだよ。父祖の代から敬虔なカソリックだ。神よ。神は芸術を滅ぼすとも言われるのか。だがこれなくして何の人間だ。芸術の魂が喪われれば生命などただの新陳代謝にすぎん。そうだともし！　ミトコンドリアがエネルギーを生産しとるにすぎない。ただの化学反応の集積だ。人間など物的な作用、その刹那の現象にすぎんじゃないか」

パリは今日も雨だった。

悲憂に打ちのめされた朝っぱらからこんな言葉に応える力がわかない。頭もまとまらない。だがふとアンジェラの脳裏に皮肉な思いが過ぎる。

実際、ファルコの言っていることは彼の意向に反して実にあたりまえな科学的事実だ。知的概念も恋愛感情も現に起こっている事象としては化学的な現象だ。改めてそう考えて見直すと今眼前で展開している現実の光景も不思議なものに感じられる。私たちは何をしているのか。或いは何をしていないのか。ここで話したり考えたりしていることも有機物の特性に基づく現象、可も不可もない空っぽの物的現象なのだ。自分たちはその内部で起こったフィクションではない。

アンジェラは溜息した。ばからしいわ、気分を変えなくっちゃ。そう心中で独白する。

ユリアスはと言えば茫然とバルコニーの雨を眺めていた。

昨夜は彼もファルコのゲストルームの一つに泊まったのである。ユリアスは当分ここに逗留するしかないし、アンジェラもきのうは独りのアパルトマンに帰る気分になれなかったからだ。

ダイニングに赴く。冷蔵庫から生ハムの塊りとナイフとシャンパーニュとを奪ってくるユリアスに訊いた。

「食べる？」

若者は相変わらず振り返らない。

「私はいりません。あなたが起きてくる前にカフェ・オレとクッキーとで済ませましたから」

アンジェラがくしゃくしゃの髪を掻きながら言う。

「あなたね、フランスに来たからって、急にカフェ・オレにしないでいいのよ。ウゾでも呑んだ方がいいんじゃない、こんな気分ときは」

「カフェ・ラテやカフェ・オレが以前から好きでした」

「そうね、あなたには、まだミルクがお似合いね」

言ってからアンジェラは捨て子だったという、機内での会話を思い出し、言葉止める。ユリアスが振り向いた。

「そんなこと気にしないでいいですよ、アンジェラ」

口調と違って彼の灰色の瞳は真剣であった。

「それより、今回の件はラグナレクの呪いだと思います」

「はあ」 アンジェラは呆れる。「何をばかなことを」

「そうです。ばかなことです。けれど私にとってはすぐリアリティがあるよ

うな気がしてならないのです」

「どうしてそんなことが言えるの。まさかあなたラグナレクを見たんじや・

」

「そう。見ました」

ファルコも目を剥く。

「何だと」

アンジェラは震えを止めようとして唾をゆっくり飲み込んだ。

「どこで」

怪訝な顔でユリアスが見返している。

「夢です。腰を覆う長い白髪をまつすぐ垂らした、端正な面立ちの若者で、自らラグナレクと名乗りました。そして私を待っていると言ったのです」

アンジェラはまたも溜息を吐く。

「何よ、ばかばかしい。あのねえ。そりや、自分が映画にするかもしれないキヤラクターだから・・・」

「ファルコから電話をもらう前でした」

ファルコが信じられないというように首を振る。どういうこと？ アンジェラは訝しがる。

「そうだとっても本を見たりすればそのイメージが」

「そのときは、まだ読んでいませんでした」

「だって、本屋に並んでいるでしょう。その表紙が記憶に残って」

「『ラグナレク伯爵』は今でもギリシアでは翻訳出版されていません。私は当時、まったく知らなかったのです。聞いたことすらなかったのです」

『「私は生存を憎む。私は、生き続けようとする浅ましい意志を憎悪している」

そう言つて伯爵ラグナレクは蒼白になっている普齊子爵を睥睨した。

「そう。わずかな湿り気があれば発生する黴や、切り取られた蛙の脚がいまだ痙攣したり屈伸したりする様子に嫌悪感を覚えるように、私は生命活動の卑しさを蔑む」

湖上城の礼拝堂の内装はバロック調の、過剰に壮麗なものであった。建築全体はゴシック様式の峻厳な造りだが数百年前に改装されたのである。内陣部に祭壇があり、その前に大きな棺が置かれていた。重厚な彫刻を施された大理石製で基台の上に肅としている。蓋には美しい女人の横臥像があつた。

「見たまえ、子爵。これがラグナレクの母、ヘレナの遺骸だ」

軽々とスライドさせられた棺の蓋の下には原形を留めない粉々の骨や乾いた肉の筋の断片があるばかりであった。

普齊は危うく叫びを抑えた。』

アンジェラは漠然とその一節を想起していた。

ラグナレクがユリアスの作品を愛する。あり得ない話ではない。けれどそんなことが起こり得る筈もない。

電話の呼び出し音が空想を破った。ファルコが出る。

「ああ、居るとも。待ってくれ」

アンジェラの方を向く。

「君にだ。ポールから」

出ると副編集長は不機嫌な声であった。

「アンジェラ。よく聞いてくれ。大事な連絡だ」

「何よ」

「映画の件に関しては君が編集長の代行として後任に選ばれた。それと副社長が社長代行だ」

副社長のミックはアンジェラに秋波を送る五十代の小さな男だ。父親が先々代の本社社長で、かつ現役員である。

「ちょっと待ってよ、ポール、そんな急に」

「私にだってわからんよ。本社の決定だ」

「でも私には。それにAN側はどうなっているのよ」

「制作部の副部長アンドレがやるらしい」

野心的な事業家の面が強かった故ジャン部長と異なり、アンドレは自らの監督する作品を今も創り続ける芸術家肌だった。

これは、いったい。

アンジェラの話を聞き終えるとファルコが森厳な面持ちを作って言った。

「俺もミックはよく知っている。アンドレのことだ。つまりアンジェラ、これは君の気持ち一つでユリアスが監督に抜擢される可能性がある、そういうことだぞ」

アンジェラは身体に震えを感じた。思考が遊離し、混乱しながらも以前から抱いていた疑念が忽然と頭をもたげる。口を突いて出た。

「ねえ、ファルコ、一つだけ教えてちょうだい。あなた、ラグナレクのイメージをどこから持ってきたの」

面食らった面持ちで彼女を見返す。

「どういう意味だ」

思惟の経路をたどる苛立ちを覚えながらアンジェラは言った。

「つまりそのモデルになる実在上の人物とか、イメージ作りの材料となった人物とかいないの、ってことよ」

ファルコが考えるふりをしてすぐに肩をすくめる。

「いないね。あのイメージを、そう、まったく何の影響もないとは言えないだろうが、ともかくも顕著にどこから、或いは誰から与えられたという記憶はない。もちろん、神からの啓示を除いてだがね。純粹な俺の空想の産物だよ」

傍らのユリアスにはファルコがこんな質問を受けている理由がわからない様

子だった。

「ファルコ、ユリアスにあれを見せて上げて。そう、手紙よ」

テーブルに広げられた用箋を見るとユリアスは驚愕の表情と猜疑の表情とを浮かべた。

「しかしこれは冗談でしょう。悪戯としか言いようがない」

アンジェラが真剣に言った。

「そうよ。無論そうだと思うわ。でもファルコに訊きたいのよ。どうしてラグナレクなんて思いついたの。今回の作品は全然あなたらしくないわ」

ファルコが困惑に眉を寄せる。

「おいおい、そんなこと言われてもな。芸術は常にインスピレーションだから。いつでもそうさ。作品に襲われるんだ。或る日、突然ね。向こう方から来るの

であつて、こつちで創るものじゃない。君の質問の意味もわかるがね。何とも
言いようがない」

ユリアス推薦は原作者の強い要望としてアンドレを動かした。副部長の一存
だけですべてが決まるわけではないがよい方向であることは確かだ。またWL
社側もファルコをよく知るミックが尻込みし、アンジェラの攻勢によつて曖昧
なまま内諾、引つ込みがつかず本社への報告書にAN社の意向が無名監督起用
の方向であると添えた。

アンジェラとユリアスとは打ち合わせのためにAN社の会議室でアンドレを
待っていた。午後三時をすぎていた。約束は二時半だったが副部長はなかなか
現れない。ファルコも同席する予定だが到着が遅れている。前日の夕方から

明け方まで徹夜で創作していて寝坊したらしい。「君だけでも先に行ってくれ、新人監督が遅れちゃ、洒落になるまい」そう言われ、ユリアスは先に出て来たと言うのだ。

アンドレは三十分遅れで現われたが表情が沈鬱だった。

「どうしたの？」 アンジェラが訊く。

「会長がユリアス起用に反対しているらしい。かなり強硬にね」

予想されることだった。だが別な意味でアンジェラに暗い予感が走る。ユリアスの表情にもそれが読み取れた。

アンジェラは思い切って言ってみた。

「ねえ、会長に会えないかしら。あなた彼のスケジュールがわかる？」

アンドレは躊躇うように思案したが、

「会えると思う。すぐにかどうかはわからないが。まずスケジュールを秘書室で確認してみよう」

そう言つて部屋を出た。

アンジェラは扉が閉まるとユリアスの顔を見る。彼が言った。

「何もなければいいのですが。会長に会うことには二つの点で意味があります」

そのとき勢い扉が開く。ファルコだった。

「やあ、どういうわけだ？ アンドレはいないのか。打ち合わせは？」

アンジェラは吐息混じりに言う。

「今重要な件で席を外しているのよ。ANの会長さんがユリアス起用に反対らしいの」

ファルコが坐りながら顔を顰める。

「そいつは、まずいな。・・いや、二つの意味でな。あのリシヤールなら確かに言い出しそうだよ。若い頃はANのライオン・ハートと呼ばれ、豪腕だったらしい。不撓不屈で皆から畏れられていた。まあそりやどうでもいい、ともかくこれを見てくれ。出がけにポストを見たら入っていたんだ」

例の封筒と書簡箋とだ。

「拝啓、ファルコ殿

そして何よりユリアスに祝杯を。彼の起用は決まった。さえぎる者は明日以降、誰もいない。

フランソワ・ドルレアン
く神々ラゲナレクの黄昏 伯爵く」

消印はない。今回も直截投函されている。

「明日以降・・・」 アンジェラが思わず呟く。「エレベータの事故以降じゃなくて明日以降ってことは・・・」

ユリアスが声を上げた。

「そうです。今回の一件を含めて言っているのです。考えてもみてください、高層ビルのエレベータが落下するなどという事故が起こり得まじょうか。どこでも設置会社が委託を受けて例月の点検を行っている筈です。いや、あのビルならエレベータの監視室若しくは制御室があっても不思議はありません。あのような事故は起こる筈がないのです」

ファルコが唸る。

「信じ難いことだがやはり会長の身に危険がある可能性を百分百否むことはできないな」

ユリアスも頷いた。

「そう考えるべきでしょう。ラグナレクと称する人物がこの事件にかかわっているとは仮定しても様々な疑問は残ります。だが詳細はどうあれ、起こり得る可能性が１％でもあれば今はそれを回避することが何よりも優先されるべきです。仮にも人の命にかかわることです。何一つはつきりしたことがわからなくともやれることはやっておいた方がいい。私たちは行くべきです」

アンドレが部屋に戻った。

リヨン駅からサンス行きに乗ってフォンテーヌブロー・アヴォン駅で駆け降りた。タクシーに飛び込む。ファルコが運転手の隣でアドレスを大声で告げた。走り出す。アンジェラは窓際で頬杖した。ユリアスが頻りにアンドレと話し込

んでいる。アンドレもついて来たのだ。時折ファルコが振り向いて背もたれから身を乗り出しながら何事か訴える。会長邸は知られた家屋敷らしく村のグラウンド通りから離れていたにもかかわらず速やかに着いた。高い塀と聳える門とが装甲のように見える。塀外を鬱蒼とした木々が被さるように囲んで絵画の背景のようであつた。

既に薄暗くなり始めている。

アンドレからの連絡が届いているためか、ファルコが名を告げる（叫ぶ）とハンティング帽の老門衛が開けてくれた。敷地路を走る。

アンジェラはふと目尻に何か映つたような気がした。心臓が止まりそうだった。車内で大きく振り返る。もう一度、外壁の傍らの植え込みあたりに目を凝らす。

「あっ」

長いコートを着た人影がその緑陰に消え入ろうとしていた。その人物は晰らかに白い髪を腰まで垂らす。刹那、彼がこちらを振り向いた。アンジェラに微笑を投げる。

「あれよ、ファルコ、あれを見て」 人の姿は既になかった。「何だ、アンジェラ」 ユリアスも目を凝らす。「今見えたのよ、白いロング・コートで、長髪の男の姿が」 「何だと！」 アンドレが困惑の表情を浮かべる。

車寄せの砂利をはじいて停まるとユリアスが飛び出し、植え込みに向かって走る。あとにファルコが続いた。アンジェラは何のことかわからず立ち尽くす。アンドレとともに車の傍らで待つ。

息を切らせてユリアスとファルコとが戻った。アンジェラは問う。

「どうだった？」

「だめです。見あたりませんでした」

「これは、いったい、どういうことなんだ！」 アンドレが訴える。

ファルコが言った。

「今は説明している暇がない。とにかく会長の様子が心配だ」

「なぜ」

だがもう誰も応えなかった。

果然としている運転手にアンジェラが料金を支払い、玄関の呼鈴を鳴らす。

吹き抜けに欄干を廻らせたエントランスに招き入れられると彼女は尋ねた。

「会長にはすぐに会えるかしら」

執事が応える。

「リシャール様は先刻よりお待ちでした。どうぞ書斎までいらしてください」

合鍵がなく、書斎の扉を斧で壊し、裂けた穴から手を回して開けた。

書斎机は大統領並であつた。堂々とした木彫で絨毯に沈む。

リシャール氏は剥げ頭に頬髯と顎鬚とを蓄えた巨軀の老人だつた。その頬の皮膚は鞣革のようで顎の発達や眼鼻の大きさ、眉の濃さなどから強靱な人物であつたことが窺える。熾烈な生存競争を一步も動ぜずに生き抜いて自らの価値観と半ば思い込みとで人生を貫き徹した男だつたに相違ない。机の上に頭を置いてこちらを向く顔は引き攣つた笑いのように歪んでいた。

贅を尽くした金糸刺繍や貝紫の紋章入りの部屋着も今となつては虚しいばかりだ。手と足をあり得ぬ方向にねじり折り、蜘蛛か意匠化した太陽を連想さ

せる。アンジェラはこどもにいじめ殺されたザリガニと日本料理店で食べた掻揚天麩羅とを同時に思い起こした。到底人間とは思えぬ奇妙な格好でディスクに突っ伏すように坐り斃れて死んでいる。全身の関節が砕けているとしか思えない。内臓からの吐血が机を囲むように溜まっていた。

メイドの悲鳴が響く。

翌日の朝、事情聴取を終えた。警察署を出たアンジェラらは新聞記者に囲まれ、もがくように抜け出す。アンドレは各所の連絡すべく別のタクシーに乗った。座席に坐ってからファルコが大仰に嘆いた。

「あの取調官の侮蔑の眼差し！　こんな田舎に四人が雁首そろえて来れば疑いを持たれるのも当然、まあそれは良しとしようじゃないか。だがあの話になった途端の彼奴め、呆れ果てたような表情をしておった、ええい、まったく以て愉

快極まりなしだ！俺だって言いたくはなかったさ！余りにもばからしい、そのぐらひは百も承知だ！だが現にこんなところまで来てしまっているという事実があるし、自称ラグナレクの手紙の件を言及せずには済ませられなかった。さすがに呪いという言葉までは出なかったがな！」

あの死に様が未だ脳裏に鮮明で、心底からの怖れと殻に入ってしまったような萎縮との情態にあつたアンジェラは疲れ果て弱々しく応えることしかできなかった。

「ねえ、ファルコ、あなたは監督の人選の件で会長に会いに来た、そう言うだけだよかったのよ」

ファルコが眉を大きく弧にする。

「余りに奇怪で謎だらけの事件だから思いあたる節があれば何でも言ってもら

いたいと奴が俺に言うから応じたまでだ。そうしたらこのていたらく！」

溜息を吐く。アンジェラも腹が立つてきた。

「ばかね。そんな科白、社交辞令みたいなものじゃない。あなたは作家だから事件をよりドラマティックでミステリアスなものにして楽しんでいるか、商売のネタにでもしようとしていると思われたのよ、きっと。もう、話が余計にこんがらがるばかりじゃない」

「冗談じゃない。こんな切実な現実を楽しめるものか。これは小説じゃない。人の命にかかわった現実問題だぞ。リシャールのあの悲惨な、凄絶な死に様が俺の頭から離れんよ。おお、何ということだ！ 何という酷いことを！」

今度は同情を感じた。

「ねえ、落ち着いて、ファルコ。何にしても真実を話したんだからそれで良か

ったのよ。これは殺人事件なんだから、わたしたちが下手に慮って言うべきことを取捨選択したりしてはいけないことなのよ。あなたは間違ってるわ。私の言い方が悪かった」

「無論俺は義しかったのだ。

だがアンジェラ、俺たちはまるで、そう、まるで呪われているかのようにだ！
いやいやむしろそうあって欲しいものだ。ええい、そうじゃないかね？ 何もわからんよりはその方がずっとましだ！

二度までもこんな事件が起こるなんてな！ しかも手紙と符合する、それに摩訶不思議なユリアスの夢だ。そうだと。人間理性を維持する為にこれは是非とも呪いでなくちゃならんよ、いいや絶対にだ！」

再び怒りが込み上げる。

「それで何、あなたの小説中の人物が実現して殺人を行っているって言う気なの？ 信じられない人ね、あなたって！ ねえ、ファルコ。お願いだからばかなことは言わないでちょうだい！ まとまる考えもまとまらなくなるわ」

「ほう、いったいどんな考えがまとまると言うんだ。俺の作ったキャラクターが自分を映画化するにあたって好みの監督に撮らせようと邪魔者を消しているということかね。ばかばかしい！ だがどういうわけかばかばかしいことの方がこんなにも強い。現実世界を席卷し、占拠しとるよ」

「うるさいわね、落ち着いてってば。わからないのが人生でしょ」

「そうだとも紛れもなくこれが人生だ。俺にはまったくわからんからな。ソクラテスよ、永遠なれ。俺は我が無知を知る！」

黙っていたユリアスが静かに言った。

「ねえ、二人とも聞いてください。ばからしい考えだとは思いますが、もしもファルコの言うとおりラグナレクが私の映画監督就任を望んでいるのなら、いいそうのこと」

彼が思いつめた眼差しを向ける。

「彼の期待に応えないようなプロジェクトを公表してみてもどうでしょうか。」

まあ、私の就任が決まらないうと問題にならない話ですけど」

アンジェラは考え込んだ。

「いいわね。面白いわ。それで白黒がはっきりする」

ファルコが口を挟んだ。

「おいおい、危険はないのか」

アンジェラは顎を挙げた。

「あなた、ほんとうにそう思うの？ ラグナレクが実在すると？」

「そんなことは言っていない。ただ今までの経緯を見れば原因は明瞭ではないにしろ、悪い予感が」

アンジェラは意識して睫毛をやや下ろし眼差しを翳してファルコの言葉をさえぎる。

「そうね。」

でも、やってみたいわ」

ユリアスが頷く。

「私も同じです」

ファルコが肩をすくめた。

「勝手にするがいいさ！」

話は決まった。

ユリアスが少し寂しげに言う。

「では早速今日から検討に入ります。いや実は腹案が既にあるんです」

アンジェラには一つの疑義が残った。

「でもラグナレクが望む映画って何？ 望まない映画って何なのかしら」

ファルコのアパルトマンに帰り着くとアンジェラは疲れたからとだけ言っ
て自分が拝借している部屋に引き上げた。シガーに火を点すと無意識に本を手
にする。活字を眺めた。

『その日は来た。』

ヘレナが九ヶ月目を迎えた。

ヴィクトイル・ドルレアン伯爵は隣室で待つ。膝頭に深く頭を抱え沈めて震えていた。

マントルピース
炉 棚の置時計が午前一時を告げる。

伯爵が頭をもたげた。産声。

部屋扉が開いた。

「旦那様、おめでとうございます。男の子です。お世継ぎがお生まれになりました」

そう言祝いだのはメイドだった。

ヴィクトルの下瞼に苦い皺が走る。家の使用人らは誰も事情を知らないのだ。

一瞬、絶望的に眼を睜^{みひら}いていた伯爵が立ち上がり、壁に懸かっていた剣をつかむ。

そして』

アンジェラは頁を閉じた。

ベッドに寝転んだまま目を閉じる。暖炉の薪の崩れる音がした。とても今はこれを読める心境ではない。何で手にしてしまったのか。ラグナレクの呪い？ アンジェラは自分自身に向かって挑発的に笑って見せた。ばかね、どうつてことないわ。再び本を開く。

『伯爵は走った。隣室のドアを蹴り開ける。

驚いて振り返る医師と看護婦との狭間に、産褥衣に紊れ髪のヘレナがベッドで半身を起こして愛し子を抱く寡れ姿。面を上げた彼女の眼差しと伯爵の目と

が合った。

刀を振りかぶる。悲鳴。彼の眼前が暗闇となった。

若き妻の足尖で、伯爵ヴィクトイル・ドルレアンは粉々の肉片に変じ、雲のように床に降り注ぎ散ったのである。

恐るべき光景に誰もが起こったことを信じられないでいた。誰よりもヘレナの絶望は深かった。彼女には直感できたのだ。我が子が今夫を、父親を殺したことが』

アンジェラは暗鬱な気持ちでまたも本を閉じる。余りにも鮮やかに場面が浮かび耐えられなくなった。周囲を見廻す。置時計が時を告げた。少し驚く。薪がまたもはぜて崩れる音。どこか遠くでヴァイオリンの低音がゆっくり唸って

いるような気がした。まるで没陽のように緩やかに焦燥して引き裂けるように。本を閉じてでも無駄だった。一度ならず読んでいるのだ。眠りに包まれるように続きの場面へと連れ戻された。

『葬儀を終えて屋敷に帰る黄昏時。伯爵の死から三日の後であつた。ヘレナは憂悶に包まれていた。

弔いが急なのは世の常であるけれど、集まった親戚、姻戚縁者らの疑惑に満ちた眼差し、教区教会の外で帽子を胸にあてて待つ領内農夫らやその妻たちの眼、眼、眼。自分が若すぎるがゆえに多くの人々から不貞の疑念を向けられている。莫大な財産を目あての結婚、余りに急な死、その異常な状況の詳細は未だ伝わらずとも町ではヘレナが愛人と共謀して魔術を使い、夫を殺したと噂さ

れていると言う。

屋敷に入れば召使らや執事までもが眼を伏せた。医師や看護婦、出産のとき部屋にいた女中らの口から幾許かずつ伯爵の凄絶な、信じ難い絶命のありさまが家内の者に洩れ伝えられ、誰もが深い猜疑を籠らせている。ただしそれはヘレナではなくフランソワに対してであつた。故伯爵の生前の態度から生まれる子にただならぬものを察知する者が少なからずいたからである。だが余りに恐ろしいその想像をこの時点で言葉できる者はいなかった。

部屋に戻るや否や我が子フランソワを抱いて彼女はハンカチーフで鼻唇を抑える。未だもの見えぬ息子に語った。

「フランソワよ、私にはおまえしかない。二人でどんなことにも耐えて生きて行きましょうね」

赤子はすり寄せられる母の睫に頬をくすぐられ、笑った。』

数日後、ユリアスの監督就任が仮決定し、脚本家の選考が為され、キャストイングの案が練られる。アンドレとの打ち合わせがいまやアンジェラの仕事のすべてであった。ユリアスは常に同伴し、すべてにかかわろうとする。自然アンジェラは彼と接する時間が長くなっていた。

克蘭クインの日取りは早くから決定している。謂わばそれが締め切りで、そこまでに一切を怒濤のように片づけなければならなかった。

午後十一時、アンジェラはユリアスの基本プランと数十枚の絵コンテとに目を通していた。これらが収集されて映画を構築するのだ。無論まったく彼独りの案にすぎないが芸術性に重きを置くアンドレには非常に大きく影響すること

になる。

「ねえ、ユリアス。これでどういう風にラグナレクの意向に沿わぬ映画にしようというの？」

眉を顰めるユリアスの眼差しが厳しくなった。

「わかりませんか。」

私は映画の中で自分が一度もやったことのないことをしようとしています。

それは生命への讃歌です。生の肯定です。

私の映画は、自分の考えが正しいとすれば、一切が残酷なまでの解析と暴露でした。ニヒリズムです。もっとも私はそれをリアリズムだと考えていますが。

ともかくも敢えて私は自分の殻を破ろうと試みるのです。つまり、今度制作する映画、『ラグナレク伯爵』では、生存を憎悪して厭世主義的なあらゆる行

いを為すラグナレクが実は何者よりも生を愛する心を秘めていたのだという結論をラストに匂わせるのです。

どうです。これこそ彼を最も憤らせるのではないでしょうか。なおかつ私にとっては芸術家としての新しい飛躍であり、多くの人々にとってはカタルシスを得る良質の作品となり、何よりファルコの小説を本来あるべきかたちに戻らせることになるのです。私はパリで彼の全作品を読破し、『ラグナレク伯爵』だけが異常であると感じました。アンジェラ、私には小説『ラグナレク伯爵』には何か秘密あるような気がしてならない。つまりラグナレクの影響が、です」

アンジェラは眼を睜いて頷く。

「わかったわ。あなたのプランをプッシュしましょう。ラグナレクが実在する

と信じるわけではないけれど、興味深いわ。ファルコのノベルを本来の姿に返し、かつラグナレクに罫をかける。あらゆる意味で面白い、最高のアイディアだわ」

ユリアスは撮影以前の段階からすべての作業をA Nの撮影スタジオで行うことを強く希望し、そのとおりにかなえられていた。ここ数年、撮影本数の減った会社側にしても別途に場所を借り上げられるより経済的で好都合だったせいもあるらしい。

この日もアンジェラはスタジオに入った。休憩時間なのか、スタッフが誰もいない。独りユリアスがチェアに坐ってうなだれていた。

「ハイ、どうしたの？ 順調なんでしょう？」

ようやく頭を上げたユリアスの双眼は虚ろで深く隈取られている。

「やあ、アンジェラ。

だめだよ。だめなんだ。こんな作品は私じゃない。違うんだ。こんなじゃない」

アンジェラは眉を顰める。

「どういうこと？ ユリアス。すべてはあなたのアイディアどおりの筈よ。あなたの考えたとおりに作業は進捗しているわ」

「そうさ。わかっている。でも満足できないんだ。いやそんなもんじゃない。日に日に嫌悪感が募り、沼にゆつくり沈むように憂鬱なんだよ。人に会うことさえうとましい」

アンジェラに不安が過ぎった。

「あなた、まさか、・・・ねえ、最近何か変わったことがない？」

今度はユリアスが眉を顰める。

「変わったこと？」

アンジェラが顎を強く上下させる。

「そう。夢は？ どう？ ラグナレクの夢を見る？」

「いや、そう言えば、見ないけれど・・・」

アンジェラは詰め寄った。

「でも、他には？ 何か、そう、うまく言えないけれど、彼から何かなかった

？」

怪訝な面持ちで頭かぶりを振るユリアス。

「何のことかな、アンジェラ。何もないよ」

「だって、ユリアス、あなたまるで……」

「まるで？」

アンジェラは躊躇い、止めた。だって、そんなばかなこと。

「アンジェラ、君の言おうとしていることがよくわからない」

それでもユリアスらしくない。何かに魂を抜き取られたかのようなだった。まるでラグナレクに憑かれてしまったみたいに……

アンジェラは思いを振り払うように目を瞑って顔を左右に動かす。微笑を作った。

「ううん、何でもないわ。ごめんなさい、私、二時からアポイントメントがあるから。ユリアス、時間があれば夕方また寄らせてもらおうわ。じゃあね」

総合雑誌社の担当と映画の広告について打ち合わせをしても身が入らず、アンジェラは腕のブルガリが示す長針の廻りばかりを気にしていた。ようやく終わったのは夜九時で、スタジオに行くのは諦めた。会社に入電話を入れるとポールが出た。「まだいたの、副編集長様！」 それに対する答は苦々しかった。「問題なんだよ、アンジェラ。ユリアスが映画に本物の屍体から取った骨肉や臓器を使いたいと言つてAN社と揉めたんだ」

「いつ？ 今日会つたときにはそんな話は聴かなかったわ」

「じゃあ、その後だろう。こっちも連絡を受けたのは二時間ぐらい前だ。ともかくすぐユリアスに会つてくれ。彼はまだスタジオにいるらしい。ファルコのところには帰っていない。確認済みだ。スタジオの電話には誰も出ない」

タクシーを飛ばす。雨が降り始め、遠雷が聞こえた。ドラマチックだわ。こ

れもラグナレクの演出なの？　そう自分に言って無理に微笑もうとした。すべてが想像上の世界に呑み込まれてしまいそうな畏怖が心のどこかで膨れつつある。彼女の生活空間を圧倒的な劇烈を持つ物語世界が優性を誇示して占拠しようとするかのように。

『ヴィクトイル・ドルレアン伯爵の死後、教区教会のイグレスィオス司祭が足繁く屋敷に通うようになっていた。美貌の司祭が若き未亡人の許を訪れる、だが風評はさほど起こらない。

「司祭様、ありがとうございます」

「いや奥様におかれましてはお気遣い下さらぬよう重ねて申し上げます。しかしながら」

「司祭様」

「お噂のことです。お赦してください。しかし私の務めとして訊かずには済ませられないのです。故伯爵の死から六ヶ月が過ぎました。奥様、お心の疵もいくらか和らぎ今ならば真実をお話いただけるのではないか、そう思いお尋ね申し上げます」

ヘレナは俯いて黙った。故人の死際の様子は少しずつ外部に広まっている。イグレスィオスが音立てぬ嘆息をした。

「ヘレナ様、私は急ぎません。お心がそれを許すときまで待ちましょう。では今日はこれにて」

司祭が部屋の扉を閉じる音が聞こえた。ヘレナはその音で司祭が去ったことに気がつく。慌てて窓際に寄った。

伯爵邸を去る騎乗の司祭と従者、その姿を見て農民たちが作業の手を止め帽子を脱ぐ。

「司祭様」

「神のお恵みのあらんことを」 祝福を授ける司祭の面立ちは沈鬱で思いこみにあらずの呈であつた。彼が通り過ぎた後に口々に衆らは言う。

「まったく以て熱心なこつて。あの恐ろしいお館にこうも頻繁に行きなさるとは」

「まったくじや。先の御領主は悪魔に殺されたんじや。よそのもんは奥様がじやと言うがそんなことあるもんけえ。あのお館が呪われとるんじや」

「おまいさんたちったら。司祭様はね、きっと他におめあてがおありなんだよ、

決まっているじゃないか」

「ばばあ、くっだらねえこと言うでないぞ」

「若奥様はお独りなもの」

「お屋敷は御立派だし」

「何を罰あたりめが」

「けれどよ、あの司祭様、何でもザレグドガルドの大商人の家柄だって言うじやねえか。わかんねえど、何狙ってつか」

「奥様もどうだか。あれだけの美男子」

ヘレナは屋敷の閉じた窓から遠ざかって行く司祭の背を見送っていた。その姿が見えなくなるとベッドに伏せ、声を殺して嗚咽した。

「ああ、神様」

すべてを告白してしまいたい。それが我が子に苛酷な運命を齎すことはわかっている。だが真実を言わなければ夫の墓碑銘は永遠に偽りで封ぜられてしまうのだ。

彼女は視線に気がついて頭をもたげた。眼を覚ましたフランソワが籠からこちらを見ている。青い瞳でまっすぐに、まるで大人の表情であつた。母と目線が合うと嬰兒の笑みで笑つた。

お乳の時間であることをヘレナは思い出した。何と賢い子だろう、空腹でも泣かずに母を待っている。自ら授乳した。乳母が様々な言い訳をしてやりたがらないからだ。使用人たちは何も言わないが誰もが気味悪がつている。彼女にとってこの部屋が屋敷のすべてとなりつつあつた。食事の下りるときには外出

同然の心構えが必要となっていた。

だが領主として継承された土地を管理運営して行く実務から逃れることはできない。これを怠ってはフランソワの生活基盤が失われてしまうのである。経営に無知であつたヘレナは頻繁にイグレスios司祭に相談していたが家令と顔を合わせたくないが為にいつしか彼を代行者として一切の指示を一任するようになっていた。

「もしも」 最近司祭はこのようなことを口にするようになっていた。「フランソワが十八になり、領地を継ぐ日が来ても私はこれを以て任務の終わりとすることなく、彼が独り立ちできるまで誠実に補佐いたすことを誓います、心正しくも憐れ不幸に見舞われた美しき信徒ヘレナよ」

五歳になったフランソワは独りで屋敷内を歩くようになる。周囲の者たちが示す態度の訝しさに気がついた。最初彼は人々が自分を見て退いたり戸惑ったりするのは特権的な地位の者への畏怖だと考えていた。だが使用人のこどもたちが物陰で密やかに囁き合い、目が合った途端に逃げながらこう叫ぶのを或る日はつきりと聞いた。

「ひゃあ、お化けに見られちゃった！」

フランソワは母が部屋から出ることを最小限にしようとする意図とこの出来事との相関を思慮した。

「おかあさん」 彼は決然と言った。「僕はおかあさんに嘘を言ったことはありません。それなのになぜ僕のお母さんが僕に嘘を言うの？」

「嘘って、何のこと、フランソワ」

「おかあさん、ほんとうのことを言ってくれないのは嘘を言うのと同じです。

おかあさんは僕を愛していない。愛しているのならどうして隠しごとをするの

？」　目が涙に潤む。

「何があつたの？」

「皆が僕をお化けだつて言うんだ！」　そしてわっと泣いた。

「ああ、フランソワ！」　母もまた彼を抱きしめ泣き崩れる。

フランソワは慟哭する母に驚いて涙を止めた。彼にはヘレナが心中で『可哀想な、可哀想な私の子！』と叫ぶのがはつきり聞こえた。

「おかあさん、ごめんなさい、お願いです、もう泣かないでください！」

翌日、母が身体のだるさを訴えて起き上がれなくなると、フランソワは食事
に下りることもせずに見守り、優しい言葉をかけ、女中らを度々呼んでは用を

言いつけたりもしたのだが「お腹が空いたでしょう。食事をお摂りなさい。これは母のお願いです」と言われやむなく階下に行った。背もたれが背丈より高い椅子に独り坐り、大きなテーブルに顔だけ出して食事していると背後に気配を感じた。振り向いた。厨房へ通じる入口に半身を隠すように料理人の子が人差し指を咥えてこちらを見ていた。

「ミハル、食べたいのかい？」 フランソワは笑みを作って優しく訊いた。三歳のミハルは吃驚した顔をして固まってしまった。椅子から降りてフランソワは彼に近づこうとした。

「やめて！」 姉のナーシャが慌てて厨房から飛び出して来て奪うように弟を抱きかかえる。怯えた双眸を顫わし、なじるようにフランソワを見た。

深く傷つけられ、哀しみが込み上げた。

「僕は、ただ、・・・」

「いいえ、お気になさらないでください」

ナーシャは斜め下を見ながら立ち去ろうとする。

「待って、君らは家の子じやないか。ファミリー僕はただミハルに・・・」

兄のドロフが現われ、妹弟とフランソワとの間に立ちはだかった。勝気な顔だった。

「やめろ！」

「なぜだ？ 僕がいったい何をしたと言うんだ。僕らは家族のようなものの筈だ！」

ドロフが憤った。「家族っ？ だっておまえは伯爵様の子じやないじゃないか」

フランソワは愕然とした。ドロフが何を言っているのか理解できなかった。だがフランソワは意識の深淵の中であの事件を記憶していた。無論インキュバスの子であることも父を殺したことも知らない。しかし無意識の底に胎蔵していた。本能的に畏れ、封印していた。ドロフの言葉はそれを暴いて心臓を貫いた。先を聴きたくなかった。そう思った瞬間、目の前の少年の肉体は爆裂して肉片と血の霧とに変じた。ナーシャが悲鳴を上げ、ミハルが泣き叫ぶ。フランソワは茫然と立ちすくむことしかできなかった。

近くにいた女中数人が聞きつけて現われ、金切り声を上げる。使用人らが集まる。駆けつけた料理人の妻が凄惨な光景に狂人のようになる。憤った料理人が包丁を持って振りかぶった姿のまま執事らに抑えられる。

「やめろ、貴様も殺されるぞ」

騒ぎに驚いたヘレナが看護婦に支えられ、階段を下りてきたが料理人の呪いの言葉と突っ立っている我が子、飛び散った血と肉片とで染まった床を見てその場で意識を喪った。

フランソワは周囲を見廻す。誰も彼に近づかなかった。一人また一人とその場を遠ざかって行った。

翌朝、家令がヘレナの部屋に来て言った。

「奥様、使用人たちが皆お暇を戴きたいと申し上げております」

彼女は顔を手で覆ったまま上げなかった。フランソワは隣の小部屋に閉じこもり内錠を掛け、室外へ出ようとはしなかった。合鍵はあったが敢えて開けようとする者はいない。

「あの音は何」

ヘレナはそう言つて頭をもたげた。家令が険しい表情で窓に額を寄せる。

「あ」

彼女も窓の傍に近づいた。屋敷の塀の外を群衆が囲んでいる。領地の農民らであつた。

「これはどういふことでしょうか」

人々は鎌や鋤を持つて叫んでいるようだった。窓を開けさせた。

「悪魔だつ」「悪魔を出せ。悪魔を殺せ」「村が滅びるッ」

ヘレナは唇が震え、血の気が引くのを感じる。「いたい」

家令のエンリケスが貼りつけたような謙譲の面持ちを以て応えた。

「奥様。彼らはフランソワ様のことを言っているのです」

「ああ」

一群の民衆をかき分ける騎乗の人がある。

「皆の衆、落ち着きなさい。狼藉をしてはならない。さあ落ち着いて、ここは私に任せるのです」

「おお、司祭様！」「司祭様、悪魔祓いをお願いします！」「このままじゃ、わしら皆殺しじゃあ！」

イグレスィオス司祭の姿を認めてヘレナの頬にわずかの血が通う。

「ああ、司祭様！・・・エンリケス、司祭様をお迎えに行つて、お願い早く！」

家令が黙って頷く。

部屋に招じ入れられるや人払いを申し出たイグレスィオスが彼女の手を握った。

もはや頼む人もないヘレナはその手を強く握り返す。

「さあ、何が起こったのかを正確にお話ください、我が妹よ」

ヘレナはすべての事情を話した。眉を顰めたまま聴き入っていたイグレシオスと言った。

「残念ながら、ヘレナ。フランソワの出生の秘密を知っては私とて到底力の及ばざるものと断じぬわけには行きません。民衆らの言い分は道理です。秘密はどこからともなく洩れ、彼らは多かれ少なかれ事実を耳にしているのでしょう。でなくば各々明日の糧を慮ることしか知らぬ衆らがあのような行為に出ることは考えられない。

ヘレナ、痛ましいことです。貴方の高貴な心掛けを思えば私も勇気が挫けます。しかしながらヘレナ、結論は変わらないのです。母である貴方にとってい

かに辛くあるとも為すべき真実は一つしかありません。明白に言いましょう、貴方の御子息は人々にとって害悪です。いかに貴方が愛そうとも。

それでもヘレナ、衆に害を与えようとも構わず貴方がその情愛を貫くと申すならば私は敢えて言葉を閉ざしましょう。ただ命運に身を任せて、そう告げるのみです。神の御心のままに、と。

しかし貴方は御身さえ善ければ他者はいかようでも構わぬと申されるのですか、ヘレナ。お聴きください、我が妹よ。

彼を処せる者は貴方以外にありません。母親に対してこれは余りに酷い言葉です。だが今日までいったい何億人の人間が苛烈な、理不尽な、残虐な運命に哀れ屠られてきたことでしょう！ 貴方だけが例外で済まされるのでしょうか、信徒ヘレナ？

私がかく言うも貴方にならば彼は危害を加えないと確信するからです。いかに悪魔の子と言えども自らの御母に手を下すことはあり得ないのです。もし為すならばそれは悪魔以下の外道、嘔吐すべき蛆虫以下の存在でしかない」

司祭が黙ってヘレナの顔を窺う。

「司祭様、いったい、私に何をしろと仰るのでしょうか」 その声は震えた。

「悪魔をその生まれた場所に帰すのです。冥府のその奥深くへ」

「司祭様、おお、何と言うことを、貴方は何ということをおっしゃるのですか。

それはできません。私にはできない。貴方は我が子をこの手で殺せと申されているのです」

「ヘレナ、ではこれ以上の犠牲を出すことを貴方はどのように考えるおつもりか」

「この土地を離れます。人里から離れます」

「どこにしようと同じ。どこにでも人はいます。犠牲が絶えることはない。或いはまったく人と接することのない地に貴方が行くとして、そのような土地で貴方や御子息のような人が生きてゆける筈がありません。」

信徒ヘレナよ、一時間の後に戻ります。なにとぞそのときまでに御決断を。

そして忘れないで戴きたい、この私が今や身内よりも誰よりも貴方を深くいとおしみ慮っている事実を」

寂しげな眼差しを造り、美麗な笑みを做してイグレスィオスが去った。

一時間ヘレナはベッドに坐してうなだれたまま動かなかった。

「ヘレナよ」

司祭が部屋に入ってきた。絹袋の手荷物を小箆笥の上に置く。彼の手が彼女

の肩にかかる。

「さあ、面を上げてください」

司祭が指尖でヘレナの顎を優しく持ち上げた。「我が妹よ」 悲歎に碎かれ抗うべくもない彼女は見上げる。涙で彼の顔が滲んで見えた。

「さあ、歎いても哀しんでも、また涙に暮れようとも事情は一切変わらぬのです。そしてヘレナ、今の貴方には酷であるとしても敢えて私は言いましよう、フランソワをお子と思う必要はない、と。彼はインキュバスの悪辣な淫業により生じた者」ヘレナは『悪辣』という言葉聞いて息子を孕んだあの夜の空前の快美を思い出し、複雑な呵責に自己を苛み、表情を歪めた。「ただ貴方の胎内に宿されたというだけで子息たるべき本質を持たぬ異形者です。謂わばフランソワではない。彼を做す収集はフランソワを做す筈であつたロゴスではない。」

ロゴス

イデア

彼はフランソワのアイデアを持たぬ異端者です」

「司祭様、あの子は紛れもなく私の子、私に愛され私を愛し信じています。どうしてそのような酷いお言葉を」　だがそれを言わずイグレスオスが彼女の身体を強く引き寄せた。司祭のまとうベルベツトがヘレナの顔を包み若々しい腕が抱く。

「妹よ、迷いを断つのです。神の御心に適わなければなりません。崇高なる神の光芒のみを見るのです。あなたには見える筈。さあ、清らかなる信徒よ、御心に身を委ねなさい」

その言葉がヘレナの怯え続けた心を柔らかに解き放ち撫で、永らく見出せずにいた光を以て陶然とさせた。神の御姿が現前したかのように。

「貴方を見放しはしません。フランソワ亡き後は私が永劫貴方の傍にいます。

その為には僧籍を捨てる覚悟さえあるのです」

「イグレスィオス様、それは」

ヘレナは布地に埋めていた顔を上げた。司祭の唇が彼女の唇に重なった。驚きに眼を睜くも離れ難い接吻に目蓋を伏せる。滑らかな聖職者の指が胸元の紐をほどいた。ヘレナは彼の腕に手を添える。若き男の右手が衣をまくりまさぐった。唇を離し、彼女は吐息する。イグレスィオスの双眸が燦めいてこちらを見つめていた。

「ヘレナ、貴方を愛している」

蠕動していた肉身を言葉に衝かれる。背や腹の皮膚を這う司祭の繊細な指尖が終にそこに至り優しさを温もらせ、彼女は自分を抑えるべきすべてを喪った。

窓から差す月影が雲の過ぎりとともに緩やかな明滅を繰り返す。

ヘレナはベッドに伏せ、腰にシーツを絡めただけの姿で泣いた。チュニツクを羽織っただけのイグレスiosがボタンをゆつくりと嵌める。

ベッドに近寄り彼女を再び抱きしめた。ヘレナは逃れるように顔を背ける。

「愛しいヘレナ。私の命よ、この世界で最もかけがえない人、聖なる我が愛よ。髪を梳り、その紅潮した美しい唇を口紅で蔽い秘めてください。服を着るのです。そして私の言うことをよく聴いてください。

さあ」

僧衣に身を正したイグレスiosが手渡したものは細くて長い鎚であった。彼が絹の袋に包んで持ってきていたものはこれであった。簡易なドレス一枚の姿でヘレナはそれをまざまざと眺める。

「司祭様、これは」

「教会に保存される聖なる青銅の鎚です」

「ユリアス、どういうことなの？」

「何のことだ、アンジェラ」

「何のことって！ あなた、人間の内臓や骨を映画に使おうなんて本気で思っているの！ そんなこと赦されるわけがないわ！ 倫理的によ！」

「なぜ」

「なぜって、あたりまえでしょう？」

「だからなぜ？ 君には肝臓がないのか？ それとも脾臓、胆嚢か、或いは心臓か？ あるだろう。それを晒してなぜ罪悪なのだ」

「あるからってなぜ晒すのよ」

「真実だからだ」

「真実には晒される義務でもあるって言うの？」

ユリアスが肩をすくめて見せた。

「止めよう。空論だ。真実には晒される義務も秘匿の権利もないよ。ロゴスのない世界にそんな列然たる秩序があるわけがない」

「ロゴス？」

「知らないのか」

「知っているわ」

「古代ギリシア人が高い意義を与えた言葉で、集めるというのがその原義だ。

これは自己流の解釈だけれど、ロゴスとは物事を成り立たせるべく『諸元素』（この言葉を何と説明すべきか迷うのだけれども、ともかくイメージとし

て理解して欲しい)を収集して構築し、事象を現象せしめるものと私は考えている。遺伝子情報のようなものだ。だからロゴスは秩序法則であり、理性の源泉だとも言える」

「どうしてそれが世界にないって言うの？　すべての事象には原因があるし、万物は法則に従って因果律の中に生成消滅しているようにしか見えないけれど」

「違うよ、アンジェラ。私がなぜ臓器を欲すると思う？　ただ効果としてそれが欲しい、それだけだ。鮮度のよい内臓がリアリティを齎す。だからだ。だがなぜだろうか？　無論様々な方向からの説明が可能だ。心理的な、または哲学的な見地から。けれど、アンジェラ、私に言わせればそんな修辞学などお笑い種だ。」

私たちは細胞の塊なのにそれを忘れている。自分たちが胃壁や毛細血管、味蕾を持つ舌乳頭であること忘れている。アンジェラ、見てのとおり私たちは粘膜と細胞とのつながり集まったものだ。人間じゃない。人間と呼ばれる本質^{イデア}な^{ロゴス}どない。私たちを做す収集があるとするならば人間と呼ぶべき者を做すロゴスじゃない。それはただ、有機物の化学反応を做すだけのロゴスにすぎない」

「本気で言っているの？」

「誰もが知る科学的な事実だ」

「そうでもないわ。未知の部分だってあるのよ。たとえば心と脳との関係は正確には証明されていないし、心のメカニズムだって解明されていない筈だわ」

「では靈魂があるというのか？ ああ、またも空論だよ。アンジェラ、私たちは何も知らない」

溜息する。そんなことどうだっていいわ。

「それが何か問題なの？」

ユリアスは黙っていたが言った。

「両親は私を捨てた。私は母に愛されなかったのだ」

その刹那、アンジェラの背筋に戦慄が走った。ラグナレクがユリアスを選んだほんとうの理由がこれではないのか。

「十四歳のときに義父が教えてくれた。私は孤児なのだと知った。以来、私は何度か考えを廻らせた。母はどんな人だったのか。母がいてくれたらどんなに幸せだっただろうか。どうして私を捨てたのか。どんな事情があったのか。私を愛してくれたのだろうか。愛してくれたのならなぜ我が子を捨てたりするのか、と。

けれど現実には何も得られない。母の顔が思い浮かばない」

「ユリアス」

「私がリアリズムに執著するのは自分の存在に不安があるからだと思う。根底にあるべき何かがない。缺けていて修復できない。生きることを赦されていない、母親にすら愛されなかったのだから。

……とね。ばかげた考え方なのはわかっている。充分にわかっている。でもぬぐえない。愛されなかったという思いがぬぐってもぬぐい切れない。私が芸術に向かうのは自己言表の叫びじゃないか。ときどき自分にそう問うんだ」

「ユリアス、わかるわ。でも」

「いや、あなたにはわからないよ、アンジェラ。私はアイデアの世界が欲しい。

あるべき本質自体であり、純粹な理に則して均しく秩序正しく営まれ、巧緻細密な精確さを以て象られ、正義としてある眞實の世界が欲しい。

だがこの世はただ現実だけでしかない。物的な世界、力だけの世界だ。したたかで抜け目ない者たちが次々と人々を食い物にして踏み躪り、罰せられることのない世界。貪り儲け、そして何をするかと言えば旨いものを食べて着飾って好い家に住み異性を漁って高級車を乗り回す。ただそれだけの為に多くの人間を破滅させておきながら何の障碍も被らずに済む世界。

おぞましいよ。私は憎い。だがもつとおぞましいのは貧者もまた富者となつたならば必ず同じ行動を執るであろうという事実だ。乞食だろうが王侯だろうがその構造が同じだからだ。ただ利己心と他者への無関心とがあるだけ、粘膜と細胞との塊でしかないのだからやむを得ないよ」

「ユリアス、貴方はラグナレクにとり憑かれているのよ、彼があなたを操っている、きっとそうだわ！」

そう言いながらアンジェラはそう思っていなかった。これはユリアスの真実の内奥なのだ。むしろ彼がラグナレクを創造したのではないかという、時系列を錯綜させるような考えに襲われた。

ユリアスが笑った。

「ばかなことを。アンジェラ、あなたは心からその言葉を言っていないよ。目を見ればわかる」

沈黙。

寂しげにユリアスが言った。

「正直言って人間の内臓を使うことができるなんて本気で思っていなかったよ。」

それなのにどうしてだろう。ふふ。やっぱりあなたが言ったようにラグナレクに憑かれたかな。でもどうしてその逆でないと言い切れるのかい？」

そう言つて彼が笑つた。アンジェラは凍りついて笑えない。ユリアスが訝しげにアンジェラの顔を見つめた。何も言い出さない。薄暗いスタジオで二人茫然と時の経過を眺める。弦楽器の最低音が異様に延ばされたような雰囲気過ぎてた。

ふと。アンジェラは気がついた。暗い。あたりが余りに暗すぎた。おかしい。ここがこんなに暗い筈がない。闇が実際のスタジオの広さより遙かに広く感じられた。それに、寒い。ひどく寒かった。

「ユリアス、ちよつと」

「アンジェラ」 彼の面持ちが驚きをいっぱいに表していた。

「ねえ、変だわ、ユリアス」

「これは」 ユリアスが掌に小さな白いもの載せてアンジェラに見せた。彼女は瞠目する。

「どういうこと、これ雪だわ」

と言った瞬間、幾つもそれが目の前に現われ、ちらりほらりと落ちる。あつと言う間もなく次の刹那には広大な漆黒の空間を領して小雪が降りしきる状景となった。だがさらに驚くべきは雪がアンジェラらの足下のあたりに達してもなお落下を止めないことであつた。彼女らが立っている面よりも遙かな下方へと落ち続けていた。下を見た。

「アンジェラ、あれは！」

こんなばかなことがあり得るだろうか。彼女らは雪夜の広大な湖の中央に屹

立する城砦を鳥瞰していた。雪雲が頭上に迫っている。中空に、浮かぶように立っているのだ。

「ユリアス、どうなっているの、これ。どこにいるの、私たち！」

目を凝らすと数百m下に湖面の小波が城の基部を成す岩壁の周りを囲んで砂粒の燦めくように固着して見えるのがわかる。不思議なことに夜闇の中、銀細工のようにくつきりと映えていた。あたかも光の明度や反射の強弱などには左右されず現に在るのだと言表せんばかりである。巖上の尖塔がまっすぐこちらに向かって天を刺す。

空に透明の床でもあるかのようにであった。ユリアスが叫ぶ。

「気をつけて！ これは、これはラグナレクの世界だ！ あの城は湖上城に違いない！」

湖水から突き聳える大巖の上に天を衝く尖塔群として築された城砦。周囲五十kmの湖面は峻山に囲まれ複雑な湖岸線をなし、難攻不落を謳われるも当然、物理的に人を近づけぬばかりか威容によって人心に根源的な畏怖を与える。

「ユリアス！」

だが言うと同時にアンジェラは身体に異変を感じた。あつた筈の見えない足場が失われた。唐突に降下、髪が一切逆上する。目が開けられない風圧、弧を描くように城壁に吸い込まれる。積み上げられた壁の石が急激に大きくなった。

「ぶつかるっ！」 感触のない衝撃とともに視界を喪失する。

目蓋を開けると見たこともない部屋にいた。それなのに見覚えがあるような気がした。古い時代の暗鬱な室内装飾や調度類。夢の中のような。異様なほど鮮明であった。鮮明すぎて現実離れして見える。小卓はその解像度におい

て嵌木細工の一々までもが精緻だ。小卓の深い色合いがまさしく生粹の小卓であることを自己主張するかのように深くて焦燥させるリアリテイ、この鮮烈の強度は静の狂叫を連想させた。

寂莫の深さは計り知れない。

アンジェラらは自分たちの存在が二重露出のようにここにいながらここにいない感じを抱く。目を丸くしてこちらを向くユリアスも幽霊のように体が半ば闇に紛れ溶けていた。ここは湖上城内奥の一室であつた。

『膝頭の間に埋めていた頭をもたげる。フランソワは廊下で足音が忍ばされていることに気がついた。裸足のようであつた。闇に向かって声を上げる。』

「おかあさん？」

足音が止まる。答はなく、鍵を廻す音が聞こえた。扉が開く。廊下の闇はいくらも薄く、フランソワは入ろうとするシルエットを母と認めた。

「おかあさん、来ないで。僕は」

「フランソワ、どこにいるの。見えないわ」

その声を聴いて彼の膚に慄然が走った。

「おかあさん……」

「お願い、蠟燭を点して。見えないのよ、フランソワ」

努めて優しく語ろうとする母の口調が震えを帯びていた。フランソワは不安に襲われた。だが母に背を向けて火を点す。終えると再び向き直った。

炎照に浮かび上がり自分に向かって金物の棒を振り下ろす母の姿が目の前にあった。顔に涙を噴出させ、唇を攣らせ歯を喰いしぼり、眼周を歪めて睜く形

みひら

相。「やめてっ！」 フランソワは叫んだ。

それはヘレナに言った言葉ではなかった。氾濫の如く内奥から込み上げる自分の力に向かつてであつた。彼女の髪が牽かれ宙に吊られる。目に見えない大きな手があるかのようにであつた。母の悲鳴が上がり、鎚は落ちる。頭皮が剥がされた。空中にもかくヘレナを助けようと彼は必死で近づく。手が届かなかつた。「おかあさんっ、おかあさんっ」 紙が破られるように縦裂きに裂かれる。ヘレナが獣の咆哮を上げた。骨が音を立てて碎ける。さらに千切られた。フランソワは狂わんばかりに腕を伸び上がらせて飛び散る肉片を紛失すまいと舞いあがく。血の雨が服を濡らす。

ヘレナは原形を喪つた物質となつた。フランソワは両手でこめかみを抑えながら頬が引き千切れるほどに顎を伸ばし絶叫する。眉の弧はいびつに突き上げ

られ、目蓋は萎み寄せられた。眼は焦点を喪い、魂が破れた。人とは思えない動きで五歳の少年が床に額を叩きつけ哭き続ける。』

余りの場景にアンジェラは声を上げた。だがフランソワには届かない。アンジェラは耐え切れず叫び続ける。ユリアスが硬直した手で彼女の腕をつかんだがどうしてもならなかった。心優しいがゆえにフランソワは引き裂けてしまったのだ。血塗れになって狂乱する幼い少年。アンジェラの意識は遠のいた。

ユリアスと二人でスタジオにいる。自分たちがいつの間にか湖上城の絵コンテを凝視していたことを知った。夢の筈がない。背筋に悪寒が走り顔を見合わせた。

「ユリアス、私たち、いったい」

「どうやら」 彼の唇は震え青ざめていた。自分のだつて同じ筈だと無意識に思う。「私たちは『ラグナレク伯爵』最上の場面の御招待に与つたようですね」
あずか

『「こうして私は母を殺した。ただ自分が助かりたい為に、自分が生き延びたいが為に母親を殺戮した。たったそれだけの理由で自分を産んだ女性を虐殺したのだ」 ラグナレク伯爵はまたあの贅沢な微笑を浮かべる。

普齊子爵は身動きすることができなかった。

「子爵。これが生存だ。わかるかね。これが生命だ。胃の腑が蠕動するように母を殺した。心臓の鼓動を止めることができぬように母を殺した。これが人間行為一切の源泉だ。高邁なる諸思想の起源だ。これこそが諸概念の棟梁なのだ。
アルケー

人間が理想を追求する行為がこれであり、数千年をかけて到達した真理も皆ここから生じた。

子爵、儼が繁殖するのと何ら変わらず人もまた生き延びたいと願う。人が逆上する根拠のすべては自己の存在が脅かされるからに他ならない。

私はかつて一人の男を縛りその目の前で彼の家族を虐殺した。鉄の網を用意して火で炙り、そこに娘たちや妻を載せた。一昼夜彼女らは凄叫し続け途絶えることは一瞬たりともなかった。赤く焼けた網に肉が爛れやがて肉の薄い部分、踵あたりから骨が露われ始める。

子爵、人間は炙られてもすぐには死ねないのだよ。弱火ならなおさらだ。そのときの男の顔はまさしく見物だった。あれほど人間の眼窩が広げられ、口が開かれるのを私はそれまで見たことがなかったから。だがもしも炙られるのが

彼の家族でなければその男はそれほどまでに苦しまなかっただろう。せいぜい嘔吐するぐらいなものだ。同じ人間なのにな。所詮、それだけのことなのだよ、子爵。

家族とは自己存在の延長なのだ。家族に起こったことなら悲劇であつても他人ならば苦しむことがない。自己から遠いからだ。誰でもそうじゃないか。恋人と同じように他の男を愛する女はいない。薄汚い不誠実さだ。すべての人を均しく愛さねば不公平ではないか。差別ではないかね？ 愛などと称してもつまりは浅ましい生殖の欲望にすぎないのだよ、ふふ。家族愛も友愛も自己愛の変形だ。自己愛とは自己の存続、生存への執著にすぎない。地衣類の繁茂と変わらない。

蝶々が蜜を求めるように、獅子が脱糞するように、傭兵が焼き払った村の娘

を輪姦するように。

これが命を賭して人民の為に闘うということに他ならない。これが正義だ。

これが子や妻を愛し身をも犠牲にする行為だ。晴れた日には耕す鋤を休めて笑うことだ。昼飯を喰らい葡萄酒を呑むこと、それらだ。これが隣人に挨拶し無事を確かめ合う行為なのだ。

自分の為に、自分だけが生き残りたい欲望の為に。すべては生存を動機とする。奇妙奇態な様ではないか。なぜかと訊かれて答えられる者はどこにもいない。笑いたまえ、子爵。なぜそのように引き攣るのかね？」

普齊は憤怒を殺してようやく口を開く。

「伯爵、しかしながらただそれを試すだけの為にそのような残虐な行為をなされたのですか」

煌めくように緩やかな笑みを浮べる。

「家族を炙り殺された男の件かね？ ああ、そのことか。

無論それもできないことではなかった。ただ偶々その一族は罰せられるべき罪人だった。一家で野盗事業を十数年に渡り営んでいたのだ。娘御らは有為の青年をたぶらかし、夢中にさせては金を巻き上げるか父親に襲わせるかしていた。親爺は金すなわち命だと思うらしく此れを奪うときには必ずそれをも奪う男であつた。このような奴ばらを裁くは余りにあたりまえにすぎて興趣に缺けるものだ。いつそのこと無罪にしようかと思ひあぐねたぐらいだったよ、子爵」

「それにしても古代ならいざ知らず、現代的価値観からすれば余りに非人道的な刑罰ではないでしょうか」

「他人の身体生命を重んじぬ者らの身体生命をどうして重んじてやる必要があるのかね。それ一方だけを守る義務がなぜ生じるのか。ならば死した者らはどうなるのかね。死んでしまえばもうどうでもよいのか。人間はその行為によってのみ評価されるべきだよ。そうでなければ尊属殺しの私は人生の大きな楽しみを喪う。」

もう一つ、君は現代的価値と言うが未だ古代風の処刑を行う土地は多い。他者の文化を一方的に断じる驕りこそジェノサイドでしかない。人肉食や首狩や捕鯨食であろうとそれがその文化圏で行われる限り一概に否定すべきでない。これらは人権にも等しいことだ。

愚かなことだよ。自由、平等。誰しも楽しい我が家で培った価値観を超えるのは生理に反するものだ。他人より家族が愛しい、その構造の一端が他者文化

を批判することであるにすぎない。

楽しいことだよ、子爵。人間のこのような愚劣さを嘲笑することは。楽しいことばかりだがそれもその筈だ。すべては生存を起源とするのだから。諸細胞の集積が做す物的現象にすぎぬのだから。笑うべき自己矛盾やら嘘やらを、人間気取りの澄まし顔をして平気で為すのも当然ではないか』

アンジェラは未だ震えが止まらなかった。自分の身体なのにどうにもならない。午前一時だった。

「ユリアス、ともかくここを出しましょう。タクシーを呼ぶわ」

そう言つて電話の傍まで行き、受話器を取ろうとした瞬間ベルが鳴る。思わずアンジェラは悲鳴を上げた。

「落ち着いて。ただの電話ですよ。私が取るから」

手にするユリアスの腕も震えている。

「もしもし」

「ああ、俺だよ、ユリアスか！ アンジェラはそこにいるか」

安堵の溜息が出た。ファルコの声は電話の向こうからでも静かなスタジオに響く。「もしもし、いますよ。どうしたんですか、こんな時間に」

ユリアスが受話器を強く彼の耳に押しあてたのでアンジェラにはファルコがどう応えたのか聴き取れなかった。しかし再び蒼白となるユリアスの表情に不安を覚える。彼が受話器を置いた。

「ユリアス、早く言ってちょうだい。何があったのよ！」

「ラグナレクです。ファルコの書斎の机の上にあったらしい。手紙がいつの間

にかにそこに」

「それで？ 何て書いてあったの！」

ユリアスの喉仏が一度だけ上下する。

「ミュゼ・デュ・ルールブルで午前十一時に待つ」

タクシーはなかなか来ず苛々させられた。仕方ないじゃないの土砂降りなんだから。アンジェラは七本目のタバコを潰した。車の停止する音。座席に坐ると烈しい疲れが襲った。

「大丈夫ですか、アンジェラ」

「平気。少し草臥れただけよ。緊張が解けたのね」

そう言って黙った。ユリアスが進行方向に向き直る。

車窓に映る街灯が滲んでいる。雨滴が窓ガラスに音を立てていた。夜の闇を見ていると湖上城の中の惨劇が思考を奪う。黙り続けられなかった。アンジェラは再び口を開く。

「ねえ、あなたも見たでしょう。私たち勝てるわけがないわ。こんなに凄いなんで。そうよ、私は確かにあの場面を読んで知っていたわ。でも、どうにもならなかった。叫び続けたのよ。読むのと見るのでは全然違う。別物だったわ。受けるリアリテイの意味が全然違っていた」

憂悶を湛えて奥深くなったユリアスの双眸が濃く、アンジェラを安堵させた。「アンジェラ、私の考えは逆です」

「逆？」

「私はあの場面の強烈さに現実が色褪せ、その主権を篡奪された刹那、直感し

ました。もしかしたら生存を憎悪するラグナレクはロゴスによる統治を意志しているのかもしれない、と」

「それってどういうことなの？」

「わかりませんか？ 書物の中にあるのはイデアルな世界。ロゴスの統治する世界だ。ラグナレクは生存の滅尽の為に小説世界と現実世界とを顛倒させようと志している、そう感じたんです。彼は叡智の世界を現象させようと目論んでいる。非生存的な形而上の世界を実現しようと欲している」

「そんなことって」

「だが私たちはその片鱗を既に垣間見た。どんなに信じられなくても見たものはまさしく見たのです」

「だからって」

「いやラグナレクならできるかもしれない」

「でもそんな」

「ただし彼の意為は破綻する」

「どうして」

「アンジェラ、芸術が現実には勝ったことは未だ一度だつてないんです。今まで芸術が歴史を変えたり社会を変えたりしたことは一度だつてない。権力者を屈服させたことも争乱を止めたことも飢えや渇きを救ったことも。スナイパーに撃たれて死んだ子の亡骸を抱き歎く若い母親の悲痛をすら慰められた試しがない。

芸術はリアリティにおいて現実の切実さに負ける。現実問題の切実には到底及ばない。だからだ、アンジェラ、正義があり得ないようにラグナレクの勝利

もあり得ない。それに何かを為そうと望むこと、欲することとは既に構造的に生存の仕組んだ執著のシステムに取り込まれることです。つまり」

ユリアスがまっすぐに見据えた。

「彼が勝利してもそれは同時に彼の敗北をも意味する」

「ユリアス、あなたそれを言っていて虚しくないの」

「なぜ？ 私が芸術家だから？」

「それもあるし、人間としてよ」

「人間としても芸術家としても同じことだよ。」

アンジェラ、芸術家もまたリアリティを求める。彼の感覚にリアリティを与える何かを、だ。それはヴィヴィッドと言い換えてもよいかもしれない。最も広い意味での鮮烈のことで侘寂や静謐もこれに含まれる。心を篡奪し、天翔させ

るもの、或いは深く寂莫の中に導くもの、それらのことだ。多くの場合それは自分が予想もしなかったことに開眼し、自身を超えるときに現われる。ただしそれは不思議なことに、あらかじめ決められていたかの如く自分自身の知らなかった自らの願望と合致する。自己を超越し、自らの未知なる既存の要請に合致する。これがリアリティ感覚であり、芸術家はこれを求める。

このように自己を破り裂いて天翔することを欲するのは現実世界にリアリティが得られないからだ。自らを超えることが現実世界を超えることであり、未知なる願望に合致することは現実には真実の世界に達することと同義なんだ。

そして我々芸術家のように烈しく踴われることがないまでも、人間すべてにこの構造が蔵されていると私は考える。芸術や学問に限らず、金銭や名誉、権勢に対する欲望というごく世俗的現実的な欲望すらも、昂じるにつれ、どこか

非現実性を帯び始め、実益性よりむしろありもしない夢へと向かうような、そんな傾向を孕むように見えるから。現実以外のリアリティを求めて疾駆するかのように見えるから。

これは当然のことではないだろうか。人は未知なるものを求める生き物だ。掌にあるものをどうして今さら求められるだろうか。欲望の基本構造を、ないものを求めることだと定義してこれを間違いだと考える人間は余りいない筈です。

芸術活動もその一端にすぎない。今はないものをいずれ掌中にし、刹那のリアリティに抱かれる。

これが何を意味するかわかりますか。手に入れたものがその瞬間から色褪せる、生命を喪失する、腐壊を始めるということです。なぜならそれが既に掌中

にあるから。感覚は飽く。鈍る。魅力は崩れ、興味は失われる。そしてまたそうでなければならない。

生命は生存し続けようとする意志だからです。畢竟、未知なるものを、ないものを求めるとは、欲望が永遠に満たされないこと、無窮の飢餓、未来永劫満足に至れずもうこれでいいと満たされ尽くすことがないということ、その営みを終らせたいと望まないこと、生き続けたいと執著させ続けることだからです。

アンジェラ、芸術活動は現実を超えようとしながらまったく以て生存活動の尖鋭でしかない。だから芸術がより根源である生命維持に関することを超えることは原則不可能なんだ。生や死や飢えや悼みなどを超えることは基本的に無理でなければならない筈なんだ。

アンジェラ、確かにラグナレクの敗北は人間にとって両刃的、私たちの敗北

にも等しく、虚しい想いが過ぎるのを禁じ得ない。

だがこれは仕方がないことなのではないだろうか。どうあがいても我々は現実を生きているのですから」

『夜明けも近い頃、フランソワは立ち上がる。物音がしたのだ。廊下に出る。イグレスィオスが顎を震わせ腰を抜かしていた。フランソワは察知する。この男は様子を見に来たのだ。彼が母を唆したのだ。自分を見上げる司祭の眼は違う人間を見る目であった。』

「た」　ようやく声帯が音を発した。「助けてくれえ、お、お願いだあ」

フランソワは目蓋を伏せた。様々な現象が夜空の星の数ほどもその眉間の眞

奥を過ぎった。睜^{みひら}く。

自分の眼差しが氷よりも凍てついた薄青に変じていることがわかっていた。全身に青白いオーラが炎のように揺れながら霞のようにまとわりついていることをも。

「司祭よ、それが貴様か。宗教家、魂を説く者、理想を掲げる者であった貴様か。これが人間なのか。

浅ましい。

貴様は命乞いをするのか。そんなに生きたいのか。なぜ生きたいか理由すら知らぬくせに。貴様の如く神を奉る身でありながら生に執著するのか。信徒たちはその言葉を真摯に受けとめ遵守しているというのに。命などに惜しむ価値があるのか。惜しむ価値のあるなしを知らぬばかりか、もし生が無価値であったと悟っても貴様ら人間は生に恋々とするであろう。切断されても鶏の脚が動

くように。

イグレシオスよ、生きたいのか。いいだろう。愚かで惨めな生き物よ。生存の奴隷よ、自由意志のない生き方しか知らぬ者らよ。涎を垂らして生に執著する者らよ。僕は貴様らが下僕として生きることを赦す。

愚かな人間どもよ。貴様らに教えてやる。人間にとって最善のこととはこの世に生まれて来ないことだったと言うことを。

さあ司祭よ、立つがよい。人間の終焉よ、これから僕が口述する奏上文を書きとめ、清書するんだ。爵位の継承を王に願い出る。嫡子は一人しかいない。すなわち理を以て僕が統治するのだ」

フランソワは哄笑した。』

ファルコのアパルトマンに着くと呼鈴を叩く。アンジェラは扉が開くまでを
もどかしく感じた。

「さあ、アンジェラ、ユリアス、待っていたぞ」

厳肅な面持ちのファルコが顎鬚で中へ入れと示す。

「挨拶はいいわ、早く見せて、ファルコ」

居間のソファに坐つてアンジェラは手紙を両手でつかみ性急に読んだ。

「祝杯を挙げようではないか、ファルコ。時節は来た。

ミネルヴァに称讃あれ。アテナ・パルテノスの永遠の勝利に祝福を。さあ、
アンジェラ、そしてユリアスともに来たれ。私は待つ、ミュゼ・ドユ・ルー
ブルにて。勝利の女神ニケを見上げる階段の下、午前十一時。

フランソワ・ドルレアン

く神々ラグナレクの黄昏

伯爵」

「この手紙は午前零時より前には確かになかったんだ。その後置かれていた。だからこの十一時は今日の十一時と考えて間違いあるまい。

で、どうする。俺は行くぞ。行かずに済ませられるか。これで奴の正体がわかる。ただのいかれたナルシストか、それとも」

ユリアスが深刻な表情でファルコの饒舌を止めた。

「そのことですが、どうやら」

「何だ？」

「そうなのよ、ファルコ」 アンジェラも言葉を添えた。「実は私たち見たのよ。あれは夢じゃなかったわ。二人そろって同じ幻覚を見ると思う？」

アンジェラはユリアスと声を合わせて経緯を話す。聞き終えたファルコが唸

った。

「すると、何か。この手紙のラグナレクは小説の中から飛び出してきたと君らは言いたいのか」

「だがそうかと言って到底あれが幻だったとは思えない。あれで幻なら現実などこにも存在しないでしょうね」 ユリアスが強く訴えた。

「うむ。俺も君らが幻影を見たとは言わん。言わんがまったくどう考えるべきか。

ユリウスよ、では、いったい、奴は何者なのだ。俺のノベルから出てきた、仮にそうだとしよう。だがな、それはどういう者だということになるのか。結局、了解しても理解ができませんぞ。わかって何のことだかさっぱりわからん、俺はだな」

「ファルコ、ラグナレクに会えばはつきりする。この眼で実際に見ればわかる」 ユリアスが言ってさえぎる。

アンジェラはユリアスに同調できなかった。不安があつた。

「ねえ、ちよつと待って、ユリアス。少し慎重に考えましょう。ねえ、そうでしょう、ファルコ」

「ううむ。俺はユリアスの意見に賛成だが」

「どうして、アンジェラ。なぜ躊躇する。行くべきだよ、私たちは」

「そうだ、アンジェラ。君らしくないな。じかに会う以外に答はあるまい」

「いいよアンジェラ、会わずにいるでしょう。だがそれでどうするつもりなんだ。あとはどうすれば最善なのか」

「それは……未だ考えていないわ」

「アンジェラ、聴いてくれ。私は会わないでいることに堪えられない」

なぜ。

「でも考えてみて、ユリアス。彼が会おうと言いつけている理由がわかつているの」

「わからない。あなたにはわかるのか、アンジェラ」

「わからないわよ。だからよく考えてつて言っているのよ。彼が私たちを呼ぶには意図がある筈よ。それがわからずに行くんじゃ、ただの思う壺じゃない」

ユリアスがアンジェラを見つめ返す。

「アンジェラ。それは私やファルコにもわかつていることです」

ファルコも言つた。

「そうだとアンジェラ。危険は承知だ。『禁じられたるものを我らは求む』

だ」

彼女は嘆息した。

朝十時三十八分。

アンジェラはユリアスとファルコとに挟まれ、目の前のガラス製ピラミッドに向かってまっすぐ進んでいる。

ルーブル宮の内庭に建つそれは幾何学的に組まれた鉄骨が支え合いガラスを張られ、ピラミッド型を成すルーブル美術館入口であった。そこからエスカレーターで地下に降りる。フロアは既に異邦人らで混雑していた。

ドゥノン翼の方面へ行く。ユリアスとファルコとの後をアンジェラは歩いた。二人の背を見つめながら心ここにあらず周囲が映像のように思えた。一階と二

階とを繋ぐ階段の下に近づく。階段は踊り場で折れて反転し、左右に分かれて上っていた。穹窿型天井の下、仰ぎ見るその踊り場にサモトラケのニケ像がある。

アンジェラはいつも声を洩らさずにいらなかった。女神像は翼を広げ、ある筈のない風に薄衣の襷を膨らませ、この場所を劇的な聖域と做している。首と両腕とが缺けた神像が象徴する古代、航海、エーゲの紺碧、それらは観る者の心奪い、空想へと駆らずにおくことがない。

彼は背を向けて階下に立っていた。

白燦の髪が腰まで垂れ、微かな空気の動きにすら揺れるスリットの入った長いコートをもとう長身で、行き交う人々とは別個に存在する尖ったモニュメントのように見えた。館内の響きや混雑とは何一つかわりを持たない。

「いたぞ」　ファルコがうめくように言った。ユリアスが唾を飲む。紛れもない。一目でわかるのだ。

「行こう」　ユリアスが促す。

アンジェラは震える足を前へ出した。歩く。

振り向く様子が彼にはなかった。

大仰な身振りでファルコが十字を切る。

「信じられんよ、アンジェラ。まるで。

似ているなんてもんじゃない」

それを横目でにらみ、もう少し小さな声で喋ってよ、とアンジェラは呟いた。だが構わずファルコが続ける。

「まったく以てあの男だ。俺が頭の中に描いたそのままが今あそこに立ってい

るのだ。君にわかるか、この畏怖が」

ついに彼の真後ろにアンジェラらは至った。凍てつく空気が皮膚を刺す。晰らかにここだけ温度が下がっていた。

誰も何も言い出せない。

喧騒が遠のくかのように感じられた。運命に引き裂かれたあの少年が青年と
なつて今現実はこの場所に立っているのだ。

白髪の男の首がゆっくりと廻る。

アンジェラは端整な横顔に嘆息した。彼の眼球が移動し、その薄青い右目が
こちらを眺める。

「来たね」

そう言つて贅沢な御世辞でも口にしたかのように微笑んだ。

彼が踵を返す。ラグナレクが正面からアンジェラらと向かい合った。

何と言う美しさだろう。彼女は息を呑んだ。白晳の皮膚は大理石のように滑らかでどのような自然の幽玄な、莊嚴な造形よりなお神の丹精を凝らされ造られたもののように繊細で精緻に造られていた。双眸は淡い色なのに複雑でいかなる濃さよりも深い色合いを湛えた湖であつた。若い。未だ二十歳そこそこではないだろうか。

だがその内奥から発する凄まじい冷氣は尋常ではなかつた。まるでエベレストの頂上でブリザードに見舞われたかのように峻嚴で不可侵、彼の立つ領域だけが遠近感を異ならせた時空を做している。

アンジェラはふと彼女ら以外の人々の仕草や表情や動きから、ラグナレクが存在が彼らには見えていないのだと気がついた。

「ファルコ、アンジェラ、そしてユリアス」

彼は手を差し出さなかった。

「折角だからグランド・ギャラリーを散策しながらゆっくり話しをしようではないか」

再び背を向けようとする。ファルコが強く声を吼した。

「ちょっと待て。貴様、どういうことだつ。ふざけるのもいい加減にしろ、貴様は何者だ」

彼が振り返る。

「フランソワ・ドルレアン伯爵。ラグナレク」

彼が左手を差し出した。アンジェラは小さく叫んだ。

ラグナレクの左肩から尖が螺鈿の光沢のように揺らぎ移ろい、ARMという

三つのアルファベットになったのである。もっともこのときのことを後日話すとファルコはスペイン語だったと言い、ユリアスは間違いなくギリシアの文字だったと主張した。

その活字は『ラグナレク伯爵』に使用されたものと同じく見えた。ミュゼ・ドュ・ルーブルの内装飾や彫刻や絵画がその活字の印刷された頁の紙であつた。文字はインクの印字などではなく言葉であり、言葉はその言葉が言い表しているものそのあるがままの真実であつた。だからアンジェラは山々が囲む広大な夜空、中天の月が皎々と照らす広々としたテラスに既にいることに気がつく。見たことがある光景、湖上城であつた。隣にはユリアスもファルコもいる。

「何だ、これは！」　ファルコが喚いた。

ユリウスが欄干から覗き込む。アンジェラもその傍らに行った。絶壁百数十

メートル下に小波が静止したように細かく見える湖が広がっている。

ユリアスがファルコを振り向いて言った。

「まただ。私たちはこれを見たんだ」

満天の星と篝火とが高所特有の強い風に烈しく揺れて影を躍らせる。ラグナレクが自らの身体から放つほの白い光に縁取られ、画面から浮き上がって見えた。

「いかがかね。これが正しい世界、小説世界だ。美しい」

ラグナレクがゆつくり微笑む。

ファルコが訴えた。

「ばかな。俺の本にこんな場面はなかったぞ！」

「これからできるよ、ファルコ。大丈夫、著作権は君にあるから」

哄笑する。

「ふざけるな、書くものか」

「書くのだ。なぜなら書かれたから。わかるかね、ファルコ。書くという行為によって書かれたものが生じるのではない。書かれたものによって書く行為が生じる。書かれたことによって書く者は顕在する。言葉があつて現象はある。

聖者ヨハネスは原初にロゴスありきと言つたではなかったか、ファルコよ。

書かれることが能動であつて書くことはその受身ではない。それが理を以て做す秩序の世界だよ。君らの意識は顛倒している。だからあのように現実世界は剋逆に満ち満ちているのだ。違うかね、ユリアス・パパタナシユー。さあ、ここまで来た記念だ。君らに若き子爵を紹介しよう」

室内からテラスに一人の少年が進み出てきた。アンジェラは彼が普齊である

ことを一目で認めた。ファルコとユリウスとが同時に声を洩らす。

「子爵、こちらがマールロの使者、帝国陸軍第一装甲騎士師団のアンジェラ・テ
イラノ少佐だ」

アンジェラは自分が漆黒の甲冑とマントとを装っていることに気がついた。
頬あての紋章は見えなかったが形を知っている。腰に帯びた剣は大きく寝かせて
佩かなければ石床を擦るほど長くまっすぐで、切尖が丸く幅広の異様な刀剣
であった。首切り役人が使う斬首剣と呼ばれるもので一振りすることしか考
えずに造られた余りにも非実戦的な代物である。このような重量級の武具を携
えながら軽がる身振りする自分が不思議であった。

ファルコは中世の傭兵のようだし、ユリウスは古代の学者のようであった。
そのユリアスの学者風トーガを留める真鍮製金具の原蛇の文様が網膜を穿つほ

ど強く見える。見覚えがあるがどういふ意味のものであつたかを思い出せない。

そればかりか、ここにあるすべてが現実世界より明晰鮮烈において圧倒的に勝っていた。この世界の諸現象を做す語彙は摩訶不思議な象徴であり、實在感にあふれ、確固たる実体を明瞭に自らにおいて示す。現実世界が刹那的な現象であり、到底実体性など持ち得ず、殆ど暴力でしかないリアリティを推参せしめるのに比べ、ロゴスの支配するこの世界には正義と正統性とが決然と存在する。

「わかるかね、私が美しいと言つたことの意味が。このようにあることなのだよ、諸君。これが君らには見ることにすらかなわぬ真実の、あるべき現実なのだ。生存に塗れた生物どもにはけして触れられぬ世界だ。

さて私がラグナレクであることを未だ疑うかね？」

ラグナレクが腕を振り放く。世界がCHATEAUという活字となって緩やかにねじれ、これもまた螺鈿の光沢の如く移ろい、精密な設計に基づくかのよう^さに斉しく細緻に再構築された。MUSEEへと変じる。

再びルーブル美術館にいた。

だがアンジェラにはここが普通の状態のルーブルでないことがわかった。見廻す。静寂で彼女ら以外に誰もいない。それだけではなかった。すべてが焦燥させるほど生々しい。映えすぎて正視し続けていられない。

ラグナレクが会釈する。

「さあ、諸君。改めて披露しよう。これが人類の誇る世界的な美術館、ミユゼ・デュ・ルーブルだ。

驚くにはあたらない。ここは純粋なルーブル。夾雑物ない、真のルーブル。

イデア論上のルーブルなのだ。君らには充分に愉しんでもらう必要がある。諸君ら野蛮人に真の美を堪能してもらおう。

ファルコ。君のような作家がそれほど瞠目するのは情けない。君ならばこんなもの我が無辺の理念空想に比べれば遙か遠く及ばぬわいと嘲るくらいの器量が欲しかった。

もつとも君らは自在に世界が遷移するのを見て私の力量に驚愕しているのかもしれない。だが残念ながらそれは違う。世界を変異させているのは諸君らだ。この変異を起こしているのは君らの意識なのだ。諸君らの心が動くから世界が変わる。君らの大脳皮質が世界を再構築するからだ。

できぬ話ではあるまい。一切は生命活動の做す識別だ。つまり意識だ。色もデッサンもデザインも一切すべてがそうだ。何を意外そうな顔をするファルコ。

君は『ラグナレク』の著者ではないか。

意識以外の何が諸君らにあるかね。他に何が展開しているかね。意識以外の状況を思い浮かべられすらいまい。それとも『人間』ということの一切が生命活動であることに是非の余地があるのか。あるまい。また意識ということと生命活動ということとに実感上の差異があるのか。ある筈もない。意識以外に生を体験することはなく、生命活動なくして意識があることを君らは考えられまいだろう。

思慮は物的現象だ。野バラが匂いで蜜蜂を惹きつけることと、脳裏で諸概念が構築されることとに違いなどない。水や土がただ物質で何の概念性もないのと同様に諸概念の意味性にも実体はない。現実世界などどう変わってもおかしくはないのだ。

さあ、ところで愚かな三人衆よ。なぜ君らの心が動いたかと思うかね。簡単だよ。諸君らの心が動くのは諸君らの心が動くからだ。君らの意識がしたことだ。すなわち意識が欲して做したことだ。『ラグナレク』を觀た彼は、ロゴスに觸發され、眞実の世界への憧憬に焦燥し、掌中にせずにはいられない。黄金を見た者が狂執に駆られるように。

それに昨今の彼はいつの時世にもまして眞実の世界を欲していた。諸君らの時代がどの時代の現実世界よりも涸渇しているからだ。意識は徹底して生存世界を拒絶し、現実を殆どヴァーチャル・リアリティ化しようとしていた。現実を超えようとあがきもがいていた。もつともそれは大昔からある君ら生存のお決まりの絡繰りだがね。『實在しないものを求める、それが実存という言葉の意義を満たす』という、例のくだらぬテーゼだ。だがこの数百年は凄まじかつ

た。

特に理性の時代が科学の時代へと移り、人間のあらゆる営みが物的現象でしかない事実を告発した瞬間、事態は劇的に変化した。愛の崩壊、信頼の滅亡、精神性の不顧幻滅が起こった。

それは善いことでも悪いことでもない。やむなきことだ。人間は触れること
もかなわぬ真実を求める生物だから。空想を駆け巡らせ、哲学を凝らし、ロゴ
スによって做されたかのように思える世界を再構築しようとする。芸術家は幻
のような彼のリアリティを求める。あらゆる成功者はないかもしれない金字塔を欲
する。宗教は到達し得ない至高を欣求する。アルタミラ洞窟の壁画さえその系
列だ。

そして、ほら」

ラグナレクが指尖で周囲をぐるりと示す。

「見たまえ。これこそ人間がロゴスを追及しようと欲し、為した模倣の群れではないか。美へのあこがれ、理想への求道、神聖の光芒を色彩や形態を以て余すことなく現前せしめようと野心した欲望の残骸、なれの果てどもだ。虚しく折れた槍や朽ちた楯、晒された墓碑銘だ。」

哀れ哀れ。ロゴスがこの地上に現れることはあり得ない。君らの芸術がどれほど美しく神聖であつてもその起源はすべて生存への執著にある。真実に至る日などあり得ない」

アンジェラはユリアスを見た。彼は唇を嚙んでいた。そうユリアスが彼女に語った論理ではラグナレクの敗北など望めない。根底から覆されている。

「残念だよ、ユリアス。私は君の考えを知っている。君は私が自家撞着し、破

綻ずると考えた。君の論理は基本的な誤りを犯している、愚かなユリアスよ。

君が言うのは所詮が君らの側からの見識のこと。私の生きる世界ではすべて現象は純粋にロゴスによつて做された正統なるもの、今見たとおりだ。異論はあるまい。君らの世界とはまったくの別物だ。まったく別の論理が働いている。いやそれ以前それ以上だ。

真実の世界と現実世界とは互いに並列する異世界ではない。比較や対立も成り立たない。対照性もなく、また表裏の関係でもない。当然一体などでは絶対がない。

あるのはただ我ら真実の世界だけだ。アイデアが現実であり、ロゴスが構築する我らが世界だけが実在している。ユリアス、聴くがよい。諸君らの世界はない。存在しない。零だ。皆無だ。実に君らの世界は何者でもないのだ。論議に

価値しない。ないものを論じて何の益があるのか。ユリウス、そもそも諸君らは諸君らの世界に現象することを何一つ説明できまい。君らは各々の事象について了解はしているが何も知ってはいない。いみじくもソクラテスが言ったように。説明しようとしても同義反復するがせいぜいだ。あたりまえだ、ないものをどうやって説明する？

よって諸君らなどない。だから残念ながら私が今見せているのも真のループルではない。片鱗ですらない。どうして君らが真実に触れられるだろうか。無だというのに！

驚くのか。こちらこそ驚く。このような自明の事実に驚くとは。

諸君らが平常見ていることではないか、リアリティがただリアリティを以て迫真する、現実であることを主張する。これだよ。

いったい、これを暴力と呼ばずして何を暴力と呼ぶべきか。正真正銘の無根拠、顧慮に価しない。ロゴスに拠らざる者、実体性のないもの。リアリティこそが現実世界の無を明晰判明に証す。君らは知るだろうか。古来曰く、色即是空。

とすれば、ユリアスよ、私が生存を憎悪することに疑義を抱くであろうか。私が生存の構築する執著を蔑み、その醜さに嫌悪を覚えずにいられぬことに。なぜ無を、論議に価もせぬと言いながら憎しむのか、と。だがユリアスよ、これは贅沢な快樂なのだ。

生存のその狡猾さ、執拗な吝嗇はまことにおぞましい。これは高尚な愉悅だよ。生存の余りの忌まわしき愚劣さに、憐れみをすら催す私自身を私は愛でる。そうだとも私はむしろ憐れんでいる、憐れんで手を差し伸べているのだよ、

諸君ら愚かな、惨めな者ども、産まれて来ない方が善かった者ども、薄汚い痴態を為して蠢く生命に。

ゆっくり楽しみながらね」

結局あのルールブルでの対面は何を意味していたのだろう。アンジェラは考えずにいられない。彼女ら三人は気がつくとサモトラケのニケの足下でまさに愚か者のように並んで坐っていた。互いに顔を見合わせ、しばし呆然とした。意気込んでルールブルまで出掛けたというのに何一つも解決しなかったばかりか何が起こったのかすらよくわからなかった。

そう言えばあのときはすっかり度肝を抜かれて彼の殺人行為を詰問する機会がなかった。もっともラグナレクなら殺人など慈善事業の一つだと言い兼ねな

いだろう。そもそも書物の人物に殺人罪が問えるだろうか。

ともかくもあれ以来ユリアスの仕事は確固たるものとなっていた。方向性が揺らぐことはなかった。何がどう好影響したのかを具体的に理解することはできなかったがアンジェラには好い方向だと思えた。

主役の選定は非常に難航した。何しろ実物のラグナレクを見てしまったのだから当然だ。

ユリアスがマルタという名の若き舞台俳優を起用して決着するのだがその理由は彼マルタの双眸の繊細な青色の移ろいであった。数々の残虐行為が論理を超えて観る者の心情に訴え、微妙な余韻を残すといった目的に適うと思えたからだ。

撮影開始後、様子を見に来たアンジェラに向かってユリアスが嘆息交じりで

言った。

「本物の、あの徹底した苛烈さはない。湖のように静かな、凍てついた凄さがね。もしあれを出せる俳優がいるなら私は結果がどうなろうと間違はなくその人物を出すね。人間を三千フィートの高みにまで奪い連れ去る悲壮があるから。すべての芸術家が恍惚とせずにはいられないリアリティがね。もしそれによって現実世界が滅尽させられようとも、私ならそれを選ぶ」

彼女は微笑したが暗鬱が過ぎるのを禁じられなかった。話題を変えよう。

「ラグナレクはなぜ邪魔しないのかしら」

「わからないな。でもどんなに邪魔してみても代役がないという事態には変わりがないからね。そのせいじゃないかと思う」

「信じられないわ。彼が妥協するなんて」

「でもさすがに本人以外には出せないからなあ、あの迫力は。かと言って彼が私のカメラの前に立って演技するなんて、想像できる？」

アンジェラは思わず吹き出した。

ユリアスがフィルム撮影ではなくデジタル化を希望してデジタル・カメラを使いたいと言ったり、メイキャップ・アーティストを泣かせたり、コンピュータ・グラフィック・アーティストを五十人も雇って場面ごとに分担させたりと撮影に至るまでは様々に揉めながらもほぼ順調であった。彼が編集担当、コンセプト・デザイン担当、サウンド担当、衣装デザイン担当をゼロの状態から自身で探して面会し、徹底して自分の考えをレクチャーしたことがその大きな原因だった。

そして一日に二時間とは眠らない数ヶ月が続いた。

努力にもかかわらず不評であつた試写会を終えて二週間後の上映の初日、アンジェラはユリアスの提案でファルコと待ち合わせ、三人でオペラ・ガルニエに近い大型映画館に向かった。行列ができていた。三人で並ぶ。

「試写会での反応はよくありませんでした」 ユリアスが率直に認めた。ファルコが言う。

「そうでもない。やはり主役なのだ。マルタを使ったのは失敗だった。どうにも物語が中途半端にならざるを得なかった。だが仕方ないのだ。それによって人類の存亡に寄与したとも思えばいいのさ。ほんとうの『ラグナレク』を観て皆が真実の世界を欣求したらどうする？」

そして笑った。

入場が始まる。その動きをぼんやり眺めながら、

「でもほんとうにラグナレクの妨害がなくてよかったわ」

笑ってアンジェラは言ったが応えるユリアスの眼差しは真剣だった。

「それです。何の障碍も誘導もなかった」

「何言っているのよ、ばかね。冗談よ。さあ、入るわよ、もう。彼はきっと彼

なりに納得したんだわ」

「違うよ、アンジェラ」

その哀しげな表情を見てアンジェラは身震いした。彼女は軽く目を閉じて首を振る。

「やめてよ、ユリアス。あなたの作品は素晴らしかったわ。自信を持ちなさい。今日それがはつきりするのよ」

「アンジェラ、私が今日はつきりさせたいことはそれじゃないんだ」

「さあ、二人ともそのくらいでいいだろう。そら、その隅に席がまだ三つ空いているよ。見ろよ、入りは上々じゃないか。さあ、あと二十分で始まるぞ」

暗くなる。AN社のトレードマークが大写しになった。序奏。そしてラグナレク伯爵と普齊子爵の晩餐の場面から始まる。

ファルコが大声を出した。

「おい、これは、何てことだ！」

アンジェラも叫ばずにいられない。思わずユリアスの横顔を見た。その睨^{みひら}かれた眼には深く湛えられた陶酔。

アンジェラらに向かって大画面の中から贅沢に微笑する薄青の双眸はマルタではない、燦然たる白髪を垂らすフランソワ・ドルレアン、ラグナレク伯爵本人

であつた。

映画は興業記録を塗り替えた。

